

地ハ上告者カ畫セシ墨線ヲ以テ境界トナスヘキモノナルコト論ヲ俟
タサレハナリ然ルニ原裁判所ハ該石垣ハ天造ニ非ルモノト認メナ
カラ築造者ノ誰ナルト年度トヲ裁判セサルハ鹿瀆不法ノ裁判ナリ
事ノ事

依テ辨明及ヒ判決ヲ與フル左ノ如シ

辨明

第一條

上告要旨第一條ノ如ク申立ルト雖モ該條ニ揭示スル明治十年二月
地租改正事務局ヨリ東京府ヘノ指令ニコソアル畦地處分規則中甲
乙兩地ノ中間ニ在ル畦地ハ上層地ノ所屬トスヘシトハ双方ニ所屬
ノ證據アラサルトニ用ニヘキモノニシテ從前ヨリ下底所屬ノ證據
アルモノニ對シ用ニヘキ規則ニアラス抑本案ノ爭點タル被上告者

ハ論地ハ往年ヨリ境垣(上告者カ植タリト云杉垣)ヲ取設ケ其内ヲ庭
園ニ造リ黃楊躑躅梅椿等ヲ植込年々手入ヲ加ヘ溝ヨリ北ノ庭木ト
等シク取捨ヘ被告ノ庭園ナルコト疑ヒナシト申立シニ上告者於テハ
畦地ノ地脚溝ノアル所迄上告者ノ所有地ニテ該地ノ土質ハ土砂混
淆ノ地ニテ土留ニ梅椿黃楊躑躅枇杷ノ數種ヲ實生ヨリ成木セシメ
タル雜木ニシテ決シテ被告申立ル如キ柴山并庭樹ノ体裁ニアラス
ト云ノ爭論ニシテ現場實見ノ上ニアラステハ之ヲ判決スルニ由ナ
キモノナルニヨリ主任官派出實地臨檢ヲ爲シタルニ樹木ノ種類ヨ
リ該地ノ形狀ニ至ルマテ現然被告庭前ノ姿ヲ爲シ百印以東ニ至ル
樹木ト種類態樣ヲ異ニシ上告者陳述ノ如キ形狀ヲラサルコト視認
メ以テ之カ判決ヲ爲シタルモノナレハ全ク下庭地所屬タルノ証憑
アルモノニ付必シモ右畦地所分規則ニ依テサリシトテ不法ト云ヘ

第二條

同第二條ニ中立ル實地調査ノ義ハ成ヘク丈之ヲ精密ニスヘキハ言
 ナ俟タスト雖モ其方法タル別ニ成規アルニアラサレ其時間ノ長短
 調査ノ疎密ノ如キ元ヨリ主任者ノ見込ニ任カスヘキモノナルヲ以
 テ原裁判官カ三時間ニ検査ヲ了シタリトテ不法トスルニ限ニテ
 ス而シテ論地ノ地質ハ土砂混淆ノ地ナルヲ岩土ヲ混セル地質ナラ
 誤認シタリト云モ本訴實檢ノ事タル元ト地質其他ノ事ニ付原被
 告カ申述フル處符合セサルヨリ之ガ處分ヲ乞ハルモノナレバ現場
 於テ各自主張スル所ノ實物ヲ驗出シ以テ之ヲ論究スヘキ筈ナルニ
 其手續ヲ爲サ、ツシ上ハ當時之ヲ裁判官ノ驗定ニ任セタルモノト
 云ハサレヲ得ス然レハ則該官於テ驗定シタルモノハ今更誤認ト云

ヲ得サルツシナラズ其驗定ヲ以テ事實ト定メキハ當然ノ事柄ナ
 リトス又石垣築造ニ杉垣植付ノ年度ヲ查定セズ云々中立ルモ石垣
 ノ義ハ原裁判所實檢ノ趣ニ依ルニ聊カ天然物ニ異ナル所アルモ只
 出岩ノ堆積シタルヲテニ石垣ト名クヘキモノニ非レハ元ト何人
 カ何ノ爲ニスルコトアツテ何ツノ間ニ爲シタル業ナルヤ分チカマ
 キモノナルニヨリ其年度ノ如キ之ヲ查定スルニ由ナキノミナラス
 假令之ヲ查定スルコトアルモ果テ上告者申立以テ如ク十余年前上告者
 カ築造シタル石垣ナリトシテ彼不被上告者カ庭園ノ形狀アル証據
 ナ破滅ニ足ラサルモノナリ而シテ其杉垣ノ如キ上告者ハ所有地内
 風除ニ植タリト云ヒ被上告者ハ所有地ノ境界ニ植タリト云フ等
 ニテ双方無証ナレバ検査ノ場所ニテ此年度ヲ調べタリト何レヨ
 リ植タリトスルノ助ケヲ爲サ、ルモノナリ左スレハ右ノ兩事ニ付

年度ヲ査定セザリシトテ不法ト云ヘキモノニアラス且上告者ハ石垣ヨリ以西論地ニ係リ三間有糸ノ地ニ種々ノ雜木アリテ又以西ニ杉垣アルハ如何ナル理由ナルヤ云々ト申立ツレトモ大体ニ於テ既ニ庭園ト認メタル上ハ其側ラニ些少ノ雜樹アル如キ固ヨリ庭先ニト名ツクヘキモノニテ其以西ニ杉垣アルハ即チ兩造ノ地塚トスルニ足ルヘキモノナレハ殊更ニ此等ノ理由ヲ問究セストモ鹿漏杜撰ト云ヘキモノニアラストス

第三條

同第三條ノ如ク申立ルト雖モ原判文ニモ明示セシ如ク該地脚ヲ以テ境界ト爲サントスレバ東西境界線ノ連續ヲ遮斷スルニ不都合ナルノミナラズ西印以東ノ境界線中地形平坦ニシテ地脚ニキ所ニ境界ヲ立タル所モコレアル上ハ必シモ西印以東ノ境界線ヲ援テ地脚

ヲ境界トスルノ例ト爲シカタク又溝域ノ義モ上告者ノ境界ト指ス場所ニ舊溝ノ遺迹ナク且現今ノ溝域モ其源ハ深ク被上告地内ニ懸入り或ハ屈曲スル等ノ事由アリテ境界ト爲スヘキモノニアラサレハ假令卯ノ一度半以西ハ溝域ヲ以テ經界トスルニ之ヲ比例トシテ論地ノ境界ヲ釋スルニ由ナキモノナリ然ラハ右等ノ論辨ハ都テ原裁判ヲ不法トスルノ理由ニナリカタクモノトス

但同第四條ニ申立ル條件ハ辨明第二條ニ依テ了解スヘシ

判決

前條々ノ如クナルニヨリ大阪上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナシトス

第二百七十三號

一九一〇
 〇判文 明治十三年十月一日 上告
 明治十三年十月十四日 申渡

埼玉縣武藏國北足立郡
中尾村九十三番地平民

上告人

嬰庭柳三郎

佐久間町三丁目廿七番

八幡儀三郎

小作殘米淹滯一件東京上等裁判所ノ裁判ヲ不當トスル上告ノ要領ハ
左ノ三項ニアリトス
第一 被上告第一號証ハ其明文ノ如ク被上告ヨリ立替ヘタル金圓
ハ上告第三號上告人ヨリ被上告人ヘノ立替金貸借金等取調ヘノ
上精算スヘシト云フニ止マリ上告人ハ未タ被上告第二號ノ書面
ヲ大看認メサルモノナレハ假令上告人ハ立替金返償ノ義務アルニ
モモセヨ其義務ノ高未タ確定ニ至ラサルモノナルノミナラズ本訴
小作米トハ全ク相關セサル筋ナルニ東京上等裁判所ニ於テ被告
上カ立會精算ヲ閣キ先ツ淹滯小作米ヲ受取タシトノ請求不相立ト
言渡サレタルハ不當ノ裁判ナリトノ
第二 本訴ノ争點タルヤ上告人ハ小作殘米ヲ要求シ被上告人ハ被
上告第一號第二號証ヲ掲ケテ相殺ヲ請ヒタルモノナリ然ルヲ東
京上等裁判所ハ兩造ノ争點外ナル精算ノ一ニ論及セラレタルハ

上告第一號第二號証ヲ掲ケテ相殺ヲ請ヒタルモノナリ然ルヲ東
京上等裁判所ハ兩造ノ争點外ナル精算ノ一ニ論及セラレタルハ

不當ノ裁判ナリトシテ

因テ辨明并ニ判決云

第一條ノ不當ノ裁判ナリトシテ

上告人於於上告要領第一項ノ如ク申立

ヨリ諸上納金上告人ニ於テ當然之ヲ負擔

被上告人其前之ヲ上納シ

キテ証ナシト雖モ被上告第一號証

タル中實上告人ニ於テ正シク看認

ハ土地ノ所有者必要ノ義務ニシテ該地

實ニ於於自歩ガテ相離ル

空ヲ爲取スシテ獨リ小作米ノミテ得ル

ハ被上告人カ上告人ニ代リ此必要ノ義務

ハ僅分ニ不納ヲ責メテ免カル

被上告人對シ其上納ノ爲メ別段金圓

主納金ニシテ其収入ニシテ小作米ヲ以テ

多シモノト謂ハサルヲ得テ何シトシ

ハ一般普通ノ事ニシテ上告人ニ熟知

主別段其手當ヲ爲メ爲メ被上告カ小作米

義務ヲ盡シ吳ル、ナラント默認シタル

然ハ則チ被上告人カ上納シタル

宜外於於此ノ理由ナシカ故ニ小作米

勞勞ル金額ハ其當時ニ於テ業既ニ上告人

謂ハサルヲ得テ故ニ其金額ハ未定

謂ハサルヲ得テ故ニ其金額ハ未定

謂ハサルヲ得テ故ニ其金額ハ未定

號証書ノ契約ニヨリ該地ノ小作米ノ内夫以テ精算スルを得ヘキハ
 當然ノコトニシテ尋常別種ノ立替金ト同視スルモノニ非ス因テ東
 京上等裁判所ニ於テ被上告カ立會精算夫閣キ先ツ淹滞小作米ヲ受
 取テ該トシテ請求不相立ト言渡シタルハ不當ノ裁判ニテ然ラズトス
 雖モ該條第二條ニテモ被上告ノ請求ニ對シテ裁判官ノ職務ヲ
 上告人ハ上告要領第三項ノ如ク申立ルト雖モ凡ソ裁判官ノ職務ヲ
 ルヤ原被爭訟ノ事柄ニ付キ裁判官自カラ其信認スル處ニ因テ之ヲ
 裁定スルハ素ヨリ當然ノコトナリトス即チ本訴ノ如キ上告人ハ小作
 殘米ノ金額ヲ要求シ被上告人ハ代納セシ金額ヲ以テ之ノ以テ相殺セ
 シコトヲ主張スル上雖モ東京上等裁判所ハ前條ニ辨明スル如ク上告
 人ニ於テ被上告カ代納シタルモノヲ閣キ單ニ小作殘米ノミヲ求ム
 ルノ理由ナキヨリ果シテ被上告カ代納シタルモノヲ閣キテ真正ナラ

シムレハ固ヨリ被上告カ請求ノ主旨ニヨリ相殺ヲ命スヘキナレト
 モ被上告第二號証ニ於テハ悉皆上告人カ視認メタルモノトモ定メ
 カタキ夫以テ先ツ之カ精算ヲナシ其代納ノ果シテ正確ナルモノア
 ルトキハ小作殘米ト相殺スヘキトノ旨趣ヲ以テ精算云々ト言渡シ
 大阪地裁ノ該等不當ノ裁判ニテ然ラズトスルハ當然ノ事ナリトス

判決

右ノ次第ナルヲ以テ東京上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナキモ
 ノトス

第二百七十四號

○寺替ニ付祠堂金附廻シ一件
 明治十三年十月十五日
 大阪府東成郡放山村平

民芳崎彌三兵衛代官人

東京府神田區今川小路

大町貝京番地士族傳平

○寺替三替師堂金附原告一併

第百二十四號 大阪府東成郡放出村道

音寺住職

寺ノ定續トクニ以テ東京被告諸氏退ノ議決ニ張綱岡一矢應崎

外四名

大坂上等裁判所ノ裁判不當ナリトシ上告ニ對シ辨明及ヒ判決スル

ト左ノ如クハ申立タル事ニ對シテ被告及原告ノ各々ハ其辯明

上告人ハ亡彌三兵衛ノ宗系ハ血屬親タレハコソ明治二年親族ノ協

議ニ從テ彌三兵衛ノ名跡ヲ再興繼業ニ彌三兵衛ト改稱シテ兵籍簿

ニ登錄セシムルノ事ヲ原上等裁判所ハ執拗ニモ被上告人カ呈供

兵籍簿ノ表面ヲ採以吊祭ノ實行如何ヲ顧慮セス濫リニ亡彌三兵衛

ト相續人ト認メタル事得證云々「被告及原告不相立事」ト判決セ

「芳崎小兵衛三男分家ス」ト記載アレハ上告人ハ小兵衛分家ニシテ

彌三兵衛ノ宗系ト非シ明カナリ原上等裁判所ニ對シテ兵籍表

ニ對シテ前文如ク判定シタルハ適法ニ裁判也

唯以時原判文ニ明治九年太政官第五十四號公布ニ根據セテ

リ本訴ノ祠堂金ハ之ニ異ナリ確乎タル上告人第三號ノ約証アリテ
 其証書ニハ「尤日牌共如來融光淨雲爲供養被差上候右ノ二品永代無
 退轉相勤サセ可申候」ト即チ爲スヘキノ義務ヲ約シタル也然ルニ終
 審廳ハ此等ノ明文ヲ措キ別段契約ナク附與セシモノト一様ノ看テ
 爲シ「凡ソ社寺ニ寄附セシモノニテ別段ノ契約ナキ分ハ寄附者ニオ
 不テ之レテ其社寺ニ附與セシモノト云フ可キ也云々」トシ義務者ヲ
 シテ其義務ヲ免レシメタルノミナラズ上告人カ祠堂金寄附シタル
 ハ常燈日牌ヲ兼テタル契約ナルハ第二號証ニ明カナルヲ原上等裁
 判所ハ其判文中ニ「該金額ハ被告カ先代ニ於テ燈明料ニ充テ該寺ニ
 寄附セシ者ニシテ原告ハ其點燈ヲ怠リタリトスルモ」云々又「點燈ヲ
 怠リタル証左ナク」云々ト只點燈ノコトニ裁判ヲ下タシテ日牌ニ付
 テハ一言ノ判決ヲモ下タサレサルハ不當ト申立タレトモ該公布ノ

面テハ「社寺學校病院等ニ寄附候土地建造物其他品物等別段ノ契約
 無之分ハ寄附主ニオイテ其所有ヲ離レタルモノトシ云々」茲ニ上告
 二號証ヲ閱スレハ書中ノ金額ヲ以テ永代如來融光淨雲菩提ノ爲メ
 燈明日牌ヲ供養セシムルノ約束ニテ取戻シ方ニ就キ嘗テ何等ノ契
 約ナキモノナリ左スレハ該公布ニ照スモ寄附主オイテハ全ク所有
 ナ離レタルモノ也トス又上告者ハ其二號証書ハ常燈ト日牌ヲ併セ
 タル契約ナルニ原判文ニハ「一ノ燈明ヲ掲ケテ他ノ日牌ノ件ニ付一
 言ノ判詞ナシト云々」トモ該二號証書ハ其標題ニ「常燈明祠堂
 燈事」ト書シ然シテ其費額ニオケルモ日牌ニ比スレハ十倍餘ノ金高
 ナルハ該契約書中重シトスル燈明ヲ舉クレハ隨テ日牌ノ立以テ可
 ナル理由ハ容易ク知リ得可キモノ也到底此等ノ辨論ヲ以テ破毀ノ
 資料ト爲ヌチ得サルモノトス依テ上告第三項ノ所論ニ對シテハ更

資辨明後下付... 前條々ノ筋合... 第二十七十五號... 明治十三年十月十五日... 原告... 根... 本... 世...

大坂上等裁判所之裁判ハ不當... 左ノ如シ... 原告... 被告... 明治二年親屬ノ協...

四〇三

事判決セラレタルハ不當ト申立タルニ該村戸籍簿ヲ閱スルニ彌三兵衛ヲ冒頭ニ「芳崎小兵衛三男分家」ト記載アレハ上告人又小兵衛ノ分家ニシテ彌三兵衛ノ宗系ニ非サルヤ明ラカナリ原上等裁判所ニオイテ戸籍表ニ照シ前文ノ如ク判定シタルハ適法ノ裁判地ニシテ第三條ノ規定ニ依リテ上告人第二ニ對シテ原判文ハ惟フニ明治九年太政官第五十四號公布ニ根據セラレタルモノナル可ケレトモ該公布ノ精神ハ物件寄附ノ當時一紙ノ約証モナク只佛陀ヲ信仰シ僧侶ニ皈依シテ漫然寄附施入セシモノナリ謂フ六ナリ本訴ノ祠堂田地ハ之ニ異ナリ確手タル上告人第二三號ノ約証アリ其明文ハ即チ爲スヘキノ義務ヲ約シタルモノ也然ルニ終審廳ハ此等ノ明文ヲ措キ別段ノ契約ナク附與セシモノト一樣ノ看テ下シ永代寄附セシモノト判定セラレタルト申立タリ依テ上告人第二

五〇六

號証ヲ閱スレハ田地四反四畝壹歩ヲ以テ永代道音寺ノ祠堂ニ付シ先祖代々並彌三兵衛カ菩提ノ爲メ別時念佛修行セシムルモノナレトモ根原該地ハ亡彌三兵衛ノ寄附銀三貫目ヲ以テ道音寺カ直チニ治兵衛五郎左衛門等ヨリ買得シタルモノナルハ被上告四號証ニ據テ明カナリ上告第三號ニ於ケルモ永代寄附ノ証ニシテ右兩通トモ嘗テ取戻シノ豫約ナキモノナリ左スレハ右公布ニ照スモ寄附主ニオイテハ全ク所有ヲ離シタルモノナレハ今上告者カ道音寺ノ住職ニ皈依セスシテ離檀シタルハトテ毫モ該田地ニ影響ヲ生スルモノニ無之到底本訴ノ論點ハ破毀ノ資料ト爲スヲ得サルモノナルニ付上告第三項ニ對シテハ更ニ辨明ヲ下サス

前條々ノ筋合ナルヲ以テ大阪上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナ

上レハ即チ檢地帳ノ基礎ナリ故ニ上告村所屬ノ地盤ハ細大漏ナク記載セルモノニシテ本訴論地ノ九反貳拾八歩ハ該証七項ニ三町六反四畝拾七步伐替畑トアル部分ニ含蓄セルモノニテ其地名字及ヒ有稅地ナル等ハ上告第一號証及ヒ第三號証ニ一目瞭然ナリ又上告第四號ハ貢租收納ノ証ニシテ謂所ノ貢米三石四斗貳升五合ハ該証中九拾石九斗三升三合ニ包含セリ而シテ其第四號ハ上告村ノ貢租收穫ノ物額ヲ示シタル即通帳ナレハ地名及ヒ各耕地ノ字等悉ク記入スルキ性質ノモノニ無之ナリ然ルニ原裁判所ニ於テ前項ノ如ク判定セラレシハ審理不盡ニシテ不當ノ裁判ナリト思考ス

前記ニ依リ第二條ニ依リ

原判文第三條中然ルニ該論所ノ草タルヤ古來ヨリ原告村不用ノ分ハ被告各村へ刈取ラセタル旨原告ニ於テ自カラ明言スルノミナラ

ス被告第二號乃至第八號証ニ據レハ現ニ被告各村於テ古來ヨリ右論地ノ道作り又ハ山燒ノ爲メ人夫ヲ差出シタル等ノ事跡モアルハ原告於テ該論地ハ被告各村ノ入會ニアルヲ認メ別段ノ証左ヲ掲ケサレバ右原告カ自陳ト被告カ古來ヨリ人ノ行事トニ憑リ該論所ハ原告各村ノ入會山ナリト認定セザルヲ得トアル以上原告者茲終審裁判所ニ於テノ陳辨ハ論山中不用ノ草秣アル旨被告上告各村終刈取ラセタル旨申供セシ然ルニ原告カ自陳云々古來ヨリ原告各村ノ入會山ナリトハ甚太不當ノ認定ナラズ何トシテ被告上告各村ニ於テ論山へ立入ラシムル義務アルニ非ス只殘餘ノ草秣アラズニ被告上告各村ヲシテ恩惠ノ下ニ立タシメントシテ被告上告各村ノ入會ノ旨ノ申供ニ過キサレハ素ヨリ原被告各村ノ入會對等ノ權利アルモノニ非サルハ論ヲ俟タサルナリ

被上告第二號乃至第八號証ハ上告村ノ惣テ承認セサル全ク本件ニ關係ナキ無効ノ証書ナリ如何トナシハ其第二號証中大月山肥草道作役一日掛トアリテ大月山ハ論山ノ字ニ非ス其第三號証中肥草山組合村々道作修繕費トアリテ何シノ山路ノ修繕經費ナル其地ヲ指のズルナケレハ本訴論山修繕ノ証ト爲スヲ得ス其第四號乃至第八號証ハ高繩山道作り人足又高繩山道作り村々高拔又高繩山肥草道痛急難所云々又横谷山本地肥草刈トシテ役又右ハ横谷山燒拂所燒方ノ節云々トアリテ高繩山大月山等ニ關スル道作り等ノ証ナルベクモ論山字柳谷山ニ係ルノ道作り又ハ出夫等ニ非サレバナリ而ルニ原裁判所ハ本訴論山ヲ字大月山字高繩山字横谷山等ニ誤認セラレ前記ノ如ク認定セラレシハ頗ル不當ノ裁判ナリト思考ス

第三條

原判文第四條中其第一號証ハ原告村ヨリ愛媛縣令ニ對シ漫ニ本訴論所ニ被告村ノ立入ヲサル様歎願セシ書面ナリトアレ其証ニ掲クル安政四年居坪畑方札寫帳ニ於テ論所ハ上告ニ村民ノ共有ナルコト明白ナルニ付被上告各村ノ者共立入ヲサル様歎願シタルモノニシテ上告村一己ノ私意ヲ以テ漫ニ入會ヲ拒絕セシ爲メ歎願セシニ非ス加之其居坪畑方寫帳ハ當時ノ代官及ヒ手代庄屋役等ノ記名調印アリテ檢地帳ト均シク公正ニシテ依據トナスニ足ルノ帳簿ナリ而ルニ原裁判所ハ前記ノ如ク上告第一號証ハ只其歎願ノミニ過キサルモノ、如ク認定セラレ上告者ノ因由トスル居坪畑方札寫帳ノ効力如何ノ判定ナカリシハ是レ審理ヲ盡サハル不當ノ裁判ナリト思考ス

又同條中第三號証ハ明治六年ノ田畑反別書土帳ナレト果シ本訴論

所ノ畑地ハ何レノ反別ニ相當スルヤ其地名又ハ字等記載ナクトア
 レ該帳簿中本訴論地ハ畑山成ト記載有之分ニテ又舊時ノ如ク畑
 地ニ使用スルコトナキモ地名字等ノ記載アラサルコト以該第三號証
 書地名字等一々附記シ著明ナレハ原裁判所カ前顯ノ如ク判決アリ
 シハ証書ヲ誤認セル不法ノ裁判ナリト思考スルハ其理明カニ
 辨明

第一條

上告要領第一條ハ原告者第二號証安政四年上告村ノ田畑居坪窺
 書ハ檢地帳ノ基礎ニシテ上告村所屬ノ地盤ハ漏サズ記載アルモノ
 ナレハ本訴論地モ該証第七項ニ三町六反四畝拾七步伐替畑トアル
 部分ニ含蓄セリ又第四號証ハ上告村ノ貢租收獲ノ惣額ヲ示シタル
 帳簿ナレハ本訴論所ノ貢米ハ其中ニ包含セルモノナリトノ趣旨ナ

レ右第二號証ハ檢地帳ノ基礎ナルニモセヨ地名字等ノ記載ナキ
 モナレハ本訴論地ハ果該証ノ反畝歩中ニ含蓄セルヤ見ルル
 カラズ其第四號証ハ貢租收納ノ總額ヲ示シタルモノナルモ是亦地
 名字等ノ記載ナクハ論地ノ貢租モ其中ニ包含セルヤ之ヲ知ルニ
 由ナシ然レバ論地並ニ其貢租共有兩証中ニ包含スルキ他不確証ヲ
 擧ケサルヲ得サルモノナルニ上告人ニ於テ其確証アルコトナク漢々
 ル反畝歩ト漢々ル貢租ノ米額ヲ指テ論地並ニ其貢租ハ其中ニ包含
 セリト謂テ得サルモノトスレハ原裁判所カ該第三號証第四號
 証ヲ採用セサリ終ハ不當非ストスルハ其理明カニ辨明
 第三條
 上告要領第三條第一項ハ論所殘餘ノ草秣アル時ハ被上告各村ヲシ
 テ刈取ラセシコト有之旨上告人カ申立タルハ論山ニ立入ラシムル

ノ義務アルトシ趣意ニ非ス恩惠ノ下ニ立タシメシトシ意ナリシニ
 原裁判所カ右申立ニ憑リ論山ハ原被入會ナリト認ラレシハ不當ナ
 リトノ旨趣ナシト原裁判所ハ右申立ノ一點ノミニ憑リ入會ナリト
 認定セシモノハ非スシテ被告^{被上}第二號乃至第八號証等ニ據リ認
 定セシモノナリ而シテ右申立ニ憑リ被上告各村カ從來該論地以草
 村ヲ刈取シ事蹟見ルヘクシテ論地ハ今更上告村ニ於テ被上告村ニ
 對シ定米ヲ要求スルノ權アリトナル確証ヲ見ルヘキモノナシ左ス
 レハ原裁判所カ右申立ヲ採用シ認定ノ証ニ充テシハ之ヲ不當ト謂
 ベキモノニ非ストス
 同第二項ハ被上告^{被上}第二號乃至第八號証タル高繩山大月山等ニ
 關スル証ナルヘクモ本訴論山字柳谷山ニ關係ナキ證據物ナルニ原
 裁判所ニ於テ右數號ノ證據ヲ採用サレシハ論所ノ地名ヲ誤認サレ

タル不當ノ裁判ナリトノ旨ナレト原裁判所ノ書類ヲ取調ワルニ被
 上告者カ該訴相爭艸山ノ儀ハ高繩山并大月山云々從前ノ通り入會
 ナリト申供シテ差出シタル各証ニ對スル上告人ノ辨駁ニ被告^{被上}
 第二號常保免村未六月足役トアリテ末文ニ大月山肥艸苅道作^役
 トアレト云々按スルニ從前餘分ノ艸被告^{被上}遺シタル節被告^{被上}人民等
 該所ニ往來ノ爲メ道直シナシタル節ノ書類ヲラントアリ又被告第
 三號末文ニ金五錢貳厘肥艸山組合村々道路修繕費云々ハ被告於テ
 已ニ論所ヲ爭ハントスルノ思慮アリテ肥艸山組合村々等ノ文意ヲ
 記載シ置タルモノト推考ストアリ又被告第四號高繩山道作^役云々
 ハ郷中人民歸依ノ觀音アリテ其參詣ノ道路ノ修繕ナリ又或ハ論所
 ノ草餘分ハ被告ニ從前苅取セ遣シ云々被告便利ノ爲メ該往來ヲ道
 直シセシモノナリトアリ又被告第七號加勢ノ文意ニ就テ當然入會

者ニアラヌトアリ又被告第八號未文ニ横谷ノ本地肥師カザルハ
 役云々本証ハ被告已ニ爭論ヲ試ムルノ意ニ作爲シ置タルヲ
 トテ是ニ由テ之ヲ觀レハ上告人ニ於テ右各証ハ本訴論所ニ關テ
 証ナリト認テ右等ヲ辨駁ナシセシテ明瞭ナラズ如何ナリト
 論所ニ關テ他山ニ關スル証據ナラハ他山ニ對テ証ナリト云
 言以テ之ヲ斥クハキ當然ニシテ何必シテ右等ヲ論辨ヲ要セシ
 キ加之上告人ニ於テ右被上告人ノ數証ニ對シ論所ハ高繩山大月山
 等ノ外ナリ柳谷山ナリ等々辨駁ヲ爲シタルハ曾テ然リシ
 今更第三號乃至第八號証ニ關テキモラ申出ル上告旨趣
 ハ相立等モテ申出ルハ其旨趣ニ依リテ論所ハ高繩山大月山
 第三條ニ關テ論所ハ高繩山大月山ニ對シ論所ハ高繩山大月山
 上告要領第三條第一項ハ正告 控訴 第一號証愛媛縣令對スル歎願

書中ニ安政四年居坪畑方札寫帳ヲ掲ケ論所ハ上告村民ノ所有ナル
 之因由ヲ記載セシニ原裁判所ハ只歎願ノミニ過キサルモノ、如ク
 認定セラレシハ審理不盡ナリトノ旨ナレトモ右居坪畑方札寫帳ニ
 記載アル地所ハ果シテ論地ニ適合スルヤ見ルベカラサルモノナル
 ノミナラズ上告自村ノ帳簿寫テ歎願書中ニ掲ケシ迄ノモノナレハ
 原裁判所カニノ歎願書ナリト認メシハ不當ニ非ストス
 同第二項ハ原告 上告 第三號証ハ地名等一々附記シタルニ原裁判所
 ニ於テ其地名等記載ナシト申渡サレシハ誤認ナリトノ旨意ナレ
 原裁判所ノ判文ヲ閱スルニ第三號証云々果シテ本訴論所ノ畑
 地ニ何シノ反別ニ相當スルヤ其地名等記載ナシトアリテ本訴論
 所ノ地名及字等ニ適合スルキモノナシトノ謂ニシテ第三號証ニ地
 名字ノ記載ナシト申渡セシ趣意ニ非ス抑本訴論所ハ如何ナル地名

字ナルヤ原被ノ申供中明カニ見ルヘキモノナキニ原裁判所ハ其地名字ヲ審カニセシテ右等解説ヲ下タセシハ稍穩當チ欠クモノアレト原來上告人ニ於テ論地ハ單ニ草山ト指稱セシノミニテ其地名字等ヲ確乎ト申立タルコトナケレハ第三號証ノ字付ニ照シ得ヘキモノニ非サルヲ以テ到底第三號証ニ字付アリトテ本訴ノ証據ニハ相立難キモノトス然レハ右穩當チ欠クモ之ヲ以テ本按チ破毀スルノ限ニ非ストス

判決

前條々ノ筋合ナルヲ以テ大坂上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由チキモノトス

第三百七十七號

○判文 明治十三年九月廿八日上告
明治十三年十月十六日申渡

滋賀縣近江國坂田郡相

撲庭村東上坂村西上坂

村保多村垣籠村春近村

堀部村人民惣代兼右相

撲庭村平民

山田九平

同東上坂村平民

村田甚藏

右代言人東京府京橋區

南鍋町一丁目七番地寄

留和歌山縣平民

植木綱二郎

滋賀縣近江國坂田郡

被上告人 吹 村

原告人 中

山地境界争論一件東京上等裁判所ノ裁判ヲ不當トスル上告ノ要領ハ左ノ四項ニアリトス

第一 東京上等裁判所ハ曩キニ本院ニ於テ大坂上等裁判所ノ裁判ヲ破毀セシ辨明ニ柴崎屋敷ト柴崎尾トハ相隣接スルヲ以テ柴崎屋敷ト云ヒ柴崎尾ト唱フルモノニテ遙カニ谷ヲ越ヘ柴崎尾ノ字アルヘキ理ナシト云フモ果シテ相隣接スルヲ証アルハ格別其柴崎屋敷ト云ヒ柴崎尾ト云フ名詞ヲ稍同シキヲ以テ遙カニ谷ヲ越テ柴崎尾ノ字アルヘキ理ナシト判決シタルハ臆斷ナルヲ免カレヌトアルニモ拘ハラヌ柴崎尾ハ柴崎屋敷ニ隣接シタルノ証ヲモ

掲ケヌシテ被上告ノ唱フル場所ハ柴崎屋敷ニ因縁アリトテ漫然被告ノ指示スル場所ヲ以テ柴崎尾ト判定セラレタルハ不當ニ裁判ナリトノ事

第二 被上告ノ指示スル場所ハ即チ上告人カ戀月尾ト稱スル山尾ナレハ山尾ノ形狀ヲ成シタルハ素ヨリ云フチ俟タズ抑該處カ戀月尾ナルコトハ上告第五號第九號等ノ証ニヨツテ判然タルニ東京上等裁判所ハ該處カ馬脊ニ均シキ山骨ヲ表ハシ始終其山尾タルヲ名ニ悖ラスシテ即チ脈絡貫通スル所タリ云々ト單ニ該所カ山尾ノ形狀ヲオシタリト云フノ一點ヲ以テ柴崎尾ナリト判定セラレタルハ不當ノ裁判ナリトノ事

第三 凡ソ見通シト唱フルハ直線前標ヲ見渡スト云フノ意義ニ外ナラス然ルチ東京上等裁判所ニ於テ柴崎屋敷ヨリ柴崎尾ニ沿マ

テ望水分ケニ至ルト解釋セラレタルハ不當ナルコトニテラヌ此ノ
 第六號第七號証(東ヒラハ伊吹村小泉大久保村三ヶ村ノ山ニ極メ)
 下アルニ抵觸シ上告人カ指示スル場所ヲ以テ柴崎尾ト決スルハ
 全ク該証書ノ明文ニ適合シテ右三ヶ村ノ山ニ連續天然ルチ東京
 上等裁判所ハ該証書ニ三ヶ村ノ山ニ極メトアルハ本訴論所ヨリ
 坂并村山境ニ至ル迄ノ間ニ三ヶ村ノ山アリトノ趣意ニ非ス其解
 釋セラレ且上告人カ指示スル柴崎尾ハ殆ント山嶺ニ至ルハ處ニ
 至テ山勢自カラ平坦ナリト雖モ其全体ヨリ之ヲ見レテ亦山尾ノ
 姿ヲ成シタルモノニシテ被上告ノ指示スル柴崎尾ト雖モ尾ノ姿
 至ツテハ更ニ異ナルコトナシ然ルニ東京上等裁判所ヨリ派遣セ
 ラレタル檢視官ハ上告村ノ指示スル柴崎尾ノ實地ノミチヲ檢視シ

テ被上告村ノ指示スル處ヲ檢視セラレヌ單ニ上告ノ指示スル柴
 崎尾ノ平坦ナル處ノミチヲ指シテ尾ノ形狀ニ非スト判決セラレタ
 ルハ不當ノ裁判ナリトノ事
 第四 論地ハ上告村ノ内相撲庭村ノ管轄ナルコトハ上告第二號第三
 號第四號証ト被上告第四號証ニ官山ト記シアルニヨツテ明瞭ナ
 リ何ントナレハ被上告第四號証ハ明治八年ノ調製ニシテ上告第
 二三號ト第四號証トノ中間ナル年月ナレハ當時該山ノ官有タル
 コトハ被上告モ亦看認タル所ナリ然リ而シテ該山ハ上告第四號証
 ニヨツテ上告七ヶ村ノ民有ニ歸スルニ至レリ故ニ是等ノ書類ハ
 該論所所有權ノ確証ナルニ東京上等裁判所ハ之ヲ不問ニ措キ枝
 葉ノ申立ナリトシ之レカ判決ヲ下サレサリシハ不當ノ裁判ナリ

因テ辨明并ニ判決ヲ與フル左ノ如シ

前キニ本院ニ於テ太坂上等裁判所ノ裁判ヲ破毀シタル辨明ハ原裁判所カ審理ヲ盡サスシテ單ニ柴崎屋敷上柴崎尾トシテ其名稱稍同シト云ヌ然レテ點ノ以テ被上告カ指示スル場所ニ柴崎尾トシテ臆斷スルヲ免カレヌト云フノ義ニシテ實地檢視ノ形狀其他何等ノ理由アリトモ被上告カ指示スル場所ヲ以テ柴崎尾ト斷定スルハ總テ臆斷ノ以テノ意ニ非ザルガ勿論ナリト云ヌ又上告第六號第七號証書(東ヒラハ三ヶ村ノ山ニ相極メ)トアルハ東京上等裁判所ノ說明之如ク當時ニ相手方伊吹小泉大久保三ヶ村ノ全山ヲ示シタルモノニシテ柴崎尾ヲ登リ詰メタル處ヨリ以北ニ於テ三ヶ村ノ山アリト云フノ文意ニアラストモ解釋シ得ヘキモノナリトス然ルニ上告八カ

指シテ以テ前標(即チ柴崎尾)トスル處ハ字九尾ヲ登リ詰メタル處ナリト

音謂フト雖モ該處ハ字小學尾ヲ登リ詰メタル處ニシテ其實地ニ於テ尾ノ形狀出アラサルヲ視レハ該處ヲ以テ前標(即チ柴崎尾)ト爲スヲ得ヘ

カラス既ニ該所カ前標ヲラサル以上ハ被上告カ指示スル所ノ山勢馬脊均シキ山骨ヲ表ハシ始終山尾タルノ形狀アリトノ實地ニ檢視ヨリ之ヲ前標トスルノ外ナシト云ヌ又上告八ニ於テ主訴要領第四項ノ如ク申立ルト雖モ一旦行政ノ處分ヲ以テ被上告第四號証則

チ本訴ノ論所ヲ以テ官山トナシ後チ又之ヲ上告七ヶ村ノ民有トナシタルハ如何ナル理由アルカ更ニ其根據ヲ視ルヘキモノナキトミ

チテ凡ソ裁判官ハ心證ヲ證書ニ資ルト否トハ素ヨリ其權内ナルヲ以テ原被兩造ノ差出シタル証書類ニ對シテ之ヲ説明スルノ義務ナキヲ以テ東京上等裁判所ハ是等ノ書類ヲ以テ枝葉ノモノトシ

之レカ説明ナカラスシテ實地ノ檢視ニヨリ被上告ノ指示スル處ヲ以テ柴崎尾ナリトシ之レニ沿フテ峯水分ケニ至ルヲ以テ境界ト斷定シタルハ不當ノ裁判ニラスト云々

但上告村ハ實地檢視ノ一ニ付申立ル所アリト雖モ實地ノ檢視ハ裁判官ノ參考ニ供スルノミニシテ土地爭論ノ場合ニハ必ラス實地夫檢視スヘク又其檢視ハ如何ナル手續キニ從フヘシトノ定規ナキノミナラス上告村ハ檢視ニ付不満足ト思惟セハ當時飽迄モ檢視ヲ乞フヘキ筈ナルニ其義ナクシテ之ヲ默過シタレハ今更其不満足ヲ鳴ラスナ得サルモノトス

判決

右ノ次第ナルヲ以テ東京上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナキモノナラズ

第二百七十八號

○判文明治十三年七月十五日上告
 明治十三年十月十八日申渡

廣島縣安藝國廣島區下

流川町八百廿三番地平

民齋藤安右衛門代理人

東京府神田區今川小路

一丁目一番地士族

根本百世

廣島縣安藝國安藝郡下

瀨野村七百六十五番地

平民

齋藤兵左衛門

買受地所名前書換請求一件大阪上等裁判所ノ裁判ヲ不當トシ上告シ
 テ破毀ヲ求ムル要領左ノ如シ
 終審判文ニ明治七年二月中村吏立會ニテ財產付立糶賣所分ヲ爲シ
 タリ云々若シ原告ハ該處分ヲ以テ村吏ハ威權ヲ以テ擅ニ爲シタル
 モノトセハ既ニ賣却濟ニナリシモノハ止テ得ス承諾セシモノトス
 ルモ原告ニ於テハ親族其他懇意ノ者モアル可キナレハ作德米ヲ以
 テ立換米ヲ辨償スルコトハ素ヨリ村吏ニ依託スルニ及ビサルコトナル
 ヘシ然ルニ之ヲ親族又ハ懇意ノモノニ托セシテ既ニ威權ヲ以テ
 擅ニ處分ヲ爲シタリトスル村吏ニ別段ハ契約証ヲモ取置スシテ之
 ヲ托スルノ理アル可ラストアレバ上告者ハ假令親族懇意ノ者アリ
 トスルモ本訴訟地ニ村吏ニ附托シ其收獲ヲ以テ貢租ニ充ンコトヲ委
 任シタルハ止テ爾後ノ貢租ノミニ非ス明治六年七年兩年分ノ貢租

等同村人ヨリ立換上納シアルニ依リ其返償ニモ充ツル爲メニシテ
 尙不足ノ分ハ金策ノ上完濟スヘキコトヲ約セシナリ夫レ斯ノ如キ事
 情アルカ故ニ親族懇意ノ者ニ委子スシテ村吏ニ依託シタルモノナ
 リ元來本村ノ舊慣ニ貢租未進者ハ投出シト唱ヘ所有ノ物件ヲ差出
 シ之レヲ糶賣シテ貢租ノ不納ニ充テル方法アリシモ其物件所有者
 ノ承諾ヲ得ズシテ糶賣ニ附スルカ如キハ本村ノ舊慣ニ依ルモ條理
 ニ照スモ決シテ爲スヲ得ヘカラサルコトナリ然ルニ前ニ掲ケル如ク
 親族ヲ聞キ村吏ニ托シタルノミナリ以テ論地ノ處分ヲ村吏ニ任セタ
 ルモノト裁判セラレシハ不當ノ裁判ナリト思考スルモ原告ハ自
 又同判文ニ原告ハ古來ノ村習慣ニ因リ貢租未進ノ爲メニ財產ヲ村
 役場ニ出シタルモノト看認ヘキモノトス何トナレハ該地所ハ即チ
 七年二月中村吏カ附立ヲ爲シタル財產中ノ部分ナレハ原告其賣却

承諾セサルコナラハ附立中ヨリ之ヲ除去スヘキハ無論沙ヨリ
 三村之ヲ除去セシコナク且前ニ論スル如ク付立ノ部分中既ニ賣却
 其儘村吏ノ手ニアリシヲ以テ之ヲ觀レハ原告ハ財產所有權ヲ自ラ
 拋棄シテ村吏ノ所分ニ任セタル事跡明白ナレハナリ云々トアレバ
 上告者ハ貢租未進ニ付財產ヲ投出シタルニ非ス村吏カ上告者以明
 治七年三月四日廣島表へ他行中其翌日即同月五日擅ニ動不動産ヲ
 取調へ之レヲ糶賣セシトスルヲ聞クヤ上告者ハ同月六日ニ歸村シ
 村吏ハ其專横ノ所爲ヲ詰問シタル處動産ノ幾分ハ既ニ糶賣セシヲ
 以テ之ヲ責ルモ益ナキニ依リ之ヲ承諾シ尙殘餘ノ動産モアリタレ
 元既ニ其幾分ヲ六日ニ賣却シアリシヲ以テ殘餘ノ動産モ翌七日迄
 引續キ賣却スルコト承諾セリ然レモ該不動産ニ至テハ未ダ賣却

セザリシ以前ナレハ前項ニ開陳セシ如ク村吏ハ依托シタルナリ然
 而モ被上告第三號証物件附立帳ナルモノニ上告者ノ不動産ヲ記
 載シアレバ是レ上告者カ承認セシ証據ニアラサレハ上告者ノ許諾
 ヲ得テ論地ヲ糶賣シタルモノト認メ得ヘキ証トスルニ足ラス況ン
 村吏カ動産糶賣ノ處分ヲ爲セシハ明治七年二月ノコトニ被上
 告者カ論地ヲ買得シタルノ証據トスル被上告第一號証ハ明治八年
 四月付ナリ若シ當時ニアリテ該土地ノ糶賣ヲモ上告者ニ於テ肯諾
 セシモノトトセハ何ソ一周年ノ久キ時間之ヲ糶賣セスシテ置クヘキ
 理アラナヤ然レハ被上告第一號証ノ論地ハ其所有權ヲ有セサル村
 吏等ヨリ賣渡シタル土地ニ係レハ固ヨリ所有權ノ移轉スヘキ理由
 ナキヲ以テ賣買ノ効力ヲ抑本訴ノ曲直ヲ判スルハ曾テ村吏等カ上
 告者ノ動産ヲ糶賣シタル時ニ當リ不動産モ共ニ糶賣スルコトヲ上告

者ニ於テ承諾シタルヤ將テ村吏等ノ擅賣ニ出タルヤヲ審究スルハ
 緊要ノ點ナルヲ此要點ニ對シ何等ハ說明モナク漫然上告者ハ財產
 所有權ヲ拋棄シタルモ以テ裁判セザレバ不當ノ裁判ナリト思考
 大ニモテハ此點ハ裁判ノ要點ニ屬スルモノト認メテ
 辨明スルハ必要ナルヲ以テ本訴ハ上告人モ申立ル通り村吏等カ上告人所有ノ動不動産ヲ擅賣
 シ貢租未進ノ筋ニ充テシハ上告人ニ於テ承諾セシモノナルヲ將テ
 村吏等ノ擅斷ニ出タルヤヲ審究スルハ緊要ナリトス抑貢租未進相
 相付カサルニ於テハ未進者承諾ノ上其財產ヲ投出シ村吏等ノ道
 取計ヲ以テ之ヲ處分スル村慣習アルハ上告人モ認メル所ナリ而シ
 テ原裁判所カ右擅賣ノ事ハ上告人〔財產所〕〔所有者〕ノ承諾セシモノト認定セ
 シ理由ハ左ノ三點ナリトス
 第一 上告人ニ於テ自己ノ財產ヲ村吏等カ擅賣スルヲ不當トセ

ハ之ニ對シ故障ヲ述ベキニ曾テ其事アラサリシコト
 第三 上告人ニ於テ論地ノ作徳米ヲ以テ立替米ヲ辨償スルカ如
 キハ親族等ニ委スルモ妨ケナキニ其義ナク却テ威權ヲ以テ擅
 賣ニ自分ノ財產ヲ擅賣スルモノト思量スル村吏ニ對シ其不動産
 論地ヲ依托シ而シテ其契約証ヲモ取置サリシコト
 第三 上告人ノ財產附立部分中既ニ賣却セシ物品ニ付テ異議ナ
 カリシノミナラス未ダ賣却濟ニ至ラサリシ物モ其儘村吏ノ手
 上告人ハ右第三點ニ對シ論地ノ收獲ヲ以テ爾後ノ貢租ニ充ツルノ
 ミニ非ス從來同村人ノ立換與タル貢租等ノ返償ニモ充ツル爲ナリ
 シ故親族等ニハ委セス村吏ニ委セシナリト申立レモ若シ上告人ノ
 申立ノ如クナラシメハ村吏ハ威權ヲ振ヒ擅斷ノ處置ヲナス上告人

以爲不正實ノ者ト云ハサルヲ得ス其不正實ノ者ニ對シ自分ノ
 財產本訴不動產ニ委託シ殊ニ何等ノ契約書ヲモ取置カスシテ之ヲ處分
 セシムルカ如何ハ人情ニ於テ有ルヘカラサル事柄ナリトス左スレ
 本原裁判所カ右ノ所爲ヲ以テ上告人カ該村ノ慣習ニ準ヒ其財產ヲ
 投出スルヲ承認シ其貢租未進ノ處分ヲ村吏ニ依頼セシモノト認定
 セシニ端ノ証ニ充テシテ不當ニ非ストス
 又右第三點ニ對シ不動產ノ幾分ハ既ニ糶賣セシヲ以テ之ヲ賣メス尙
 殘餘ノ不動產モ引續キ賣却スルヲ承諾セリ然レモ不動產本訴論地ニ至テ
 ハ賣却以前ナリ故村吏ニ依托シタリ而シテ右不動產ハ動產糶賣
 ノ時ヨリ一周年ノ久シキ時間之ヲ賣却セスシテ其儘差置キ理
 ラズヤ云々申立レ上告人ニ於テ其財產糶賣ノ處分ヲ不當ノ所爲
 ナリトセハ既ニ賣却セシ動產モ之ヲ取戻スベキハ當然ナリ況ンヤ

其殘餘ノ分ヲ賣却スルカ如キハ飽マテ之ヲ差止メ尙ホ其筋ニモ申
 立テ存分故障ヲナスヘキニ其義ナキノミナラス右等動產不動產混
 淆セシ財產附立ノ際ナレハ若シ其中糶賣ヲ肯ンセサル物品アリト
 セハ其附立帳ヨリ之ヲ除キ而シテ村吏トノ間ニ於テ確タル契約書
 ナモ取置カサルヘカラサルニ夫等ノコト同一ノ附立帳ニ記載ア
 ル内其動產ハ糶賣ヲ認諾セシモ獨リ不動產ハ之ヲ認諾セシコトナシ
 ト陳述スルモ其不動產糶賣ヲ承認セサリシ證據アルコトナシ然レハ
 原裁判所カ右動產賣却ヲ承諾セシ手續等ヨリ類推シ來テ不動產ノ
 賣却モ承諾シタルモノト認定セシハ相當ナリトス又右不動產ハ一
 周年ノ久シキ賣却濟ニナラサルモ凡ソ賣物ハ其買人無之ニ於テ
 ハ或ハ幾歲月間モ之ヲ其儘差置カサルヲ得サルモノナレハ右不動
 產賣却遷延ノ廉ヲ以テ上告人カ其賣却ヲ承諾セサリシ証ト爲スナ

得ルルモノトテ、是レハ、其ノ事實ニ依リテ、
判決、其ノ事實ニ依リテ、其ノ事實ニ依リテ、
右辨明ノ次第ナルヲ以テ大阪上等裁判所ノ裁判ハ破毀スルキ理由ナ
キモノトス

第二百七十九號

○證據金賣德金取戻一件東京上等裁判所裁判不法上告ノ判決
治十三年七月廿六日上告明
治十三年十月十八日申渡

大千葉縣上總國市原郡古
敷村六十番地平民
鎌瀧吉平

東京府日本橋區蠣殼町
一丁目二番地平民

被上告人 好川保兵衛

上告ノ要領左ノ如シ

第一條
上告人ガ明治十一年二月廿三日證據金六百二十五圓ヲ被告人ニ渡
シ、被告人ハ上告第三號第四號被告人カ押印アル請取書ヲ以テ知り
得、キ、被告夫、斯ノ如ク上告人ハ明治十二年二月廿三日ニ證據金
ヲ被上告人ニ渡シ、而シテ上告第七號第八號第九號第十號ノ如ク買
付証ヲ請取、程ノ非ナ、同日即チ明治十一年二月廿三日ニ該買
付米ヲ賣埋、キ、謂レ、被告ニ、被告上告人ニ於テ明治十一年三
月廿日ニ上告第拾三號証ヲ上告人ニ渡ス、ソ理アレ、被告ナリ、況ヤ明
治十三年四月三十日原裁判所ニ於テ原被告對審、實際、上告人(即チ原裁
判所ニ於テノ被告)代理人ヨリ被上告人(即チ原裁判所原告)代入ニ賣

理ノ証スリヤト問ヒシニ被上告代人ハ其口供第六項ニ於テ「手代天
 野清助井口三郎兵衛ノ兩人ガ証據ナリ」ト答ヘ又其七項ニ於テ「本人
 上告ト面接シタルヲ以テ証據ト入」ト答ヘタルニ付其他ニハ証據ア
 ラサルヤト問ヒシニ第八項ニ於テ「ナシ」ト答ヘタル是ニ由テミレハ
 被上告人ガ該買付米ヲ賣理メタリト申立ハ憑ル可キノ証ナキモ
 ノナリハ其第十七號証ノ如キハ被上告人ガ自儘ニ記載セシ帳簿ナ
 ルト明カナリ然ル夫原裁判所ハ上告第三號第四號ノ如キ被上告人
 ガ押印アル真正ノ証據ヲ採用セラシテ漫ニ被上告第十七號ノ帳簿
 ナ信用シ該帳簿ヲ見ルニ就レモ記載ノ順序相立居レハ該証ハ原告
 被上ノ手ニ成立タルモノナルモ商業日用ノ事ヲ記シタル真正ノ帳
 簿ト信認スルニ足レリ」ト判定セラレシハ不法ノ裁判ト思考ス

第二條

被上告人ハ控訴狀第四條ニ「蠟米商會所ノ印判ハ賣買付ニ限り用ヒ
 來ル例ニシテ決シテ他ニ用ユルコトナシ」トアレハ被上告第十一號証
 被上告代人カ明治十二年八月一日千葉縣へ差出シタル上申書ニ「蠟
 米商會所ノ朱印押捺有之右印ハ私店ニ於テハ賣買切符及ヒ仕切書
 ニ相用」トアリテ其申立一定セズ是ニ由テ之ヲ觀レハ被上告人ニ於
 テ「蠟米商會所」トアル印判ハ賣買付証ノミナラス其他ニモ押用セシ
 ヲ知リ得ヘキニ付上告第三號第四號証へモ右印判ヲ押捺セシコト明
 カナリ然ルニ原裁判所ハ是等ノ點ニ付審糾ナク單ニ被上告第二十
 號証米商會所ノ達書ニ賣付及買付証書ノ肩へ蠟殼町米商會所又ハ
 蠟米杯ト彫刻候印判ヲ相用候者有之云々トアルヲ証トセラレ「此達
 ニ因レハ被告第五號乃至第十號証右ノ肩ニ押捺シアル印章ハ賣付
 買付証書ニ相用ユルモノニテ証據金等ノ受領証ニ用ユルモノニ非

本訴ノ買付米ヲナシタルハ明治十一年二月十日而シテ米商會所當
 時ノ規則即チ上告番外第五號蠟殼町米商會所頭取ヨリ築地區裁判
 所ニ呈供シタル會所定款第十二條第一項ニ因リテ「自ラ米賣買取引
 米爲シ又ハ他人ヲ依頼テ受ケテ仲買人トナリ之ニ從事スル者ヲ以
 テ總テ仲買人ト稱スヘシ但シ他人ヲ依頼テ受ケ賣買ヲナシタル者
 其依頼人ノ姓名住所等ヲ其時々肝煎ニ申告スルモノトシ又同申
 合規則第十四條ニ因リテ「仲買人賣買約定ナセシトテ依頼人ヲ會所

へ届ケ置クヘシ云々現米金授受ノ際ニ至リ違約ナセハ前以テ届ケ
 無キ分ハ一般其仲買人ヲ違約トナストナルニ被上告人ハ本訴買付
 米ニ付上告人ヨリ依頼ヲ受ケタルトテ會所へ届ケス斯ノ如キ不都
 合アルヲ以テ其不都合ヲ蔽ハンカ爲メ當時ノ規則ヲ原裁判所へ呈
 供セス明治十二年二月改正規則即チ被上告第六號証ヲ呈供シタリ
 然ルニ原裁判所ハ本訴買付米ノ後凡一ケ年ヲ經テ改正ニナリ毫モ
 本訴買付米ノ當時ニ關係ナキ被上告第六號証ヲ採リ「仲買人ハ米商
 會所ヨリ與ヘラレタル蠟殼町米商會所何等仲買ト書シタル看板ヲ
 掲クルハ原告被上告第六號東京蠟殼町米商會所定款第十二條但書ニ
 明記アリ云々」ト裁判アリシハ不法ト思考ス

第四條
 被上告人カ深川ノ別宅へハ蠟殼町ノ出店ヨリ時々刻々相場昂低ノ

通知ヲレハ深川ノ別宅ニ於テモ相場ノ昂低ハ知り得ヘキノミナラ
 ス上告人カ明治十一年二月廿三日迄証據金延期ノ証書ヲ被上告人
 へ渡シタルハ明治十一年二月十九日ニシテ明治十一年二月十九日
 ヨリ明治十一年二月廿三日迄ハ五日間ノ猶豫アレハ上告第七號第
 八號第九號証ノ如キ之ヲ出店ヨリ取寄得ヘケンハ該第七號第八號
 第九號証ヲ深川ノ別宅ニ於テ授受シ得ヘキハ疑ヲ容レサル所ナリ
 然ルニ原裁判所ハ原告被上告人カ深川ノ別宅ニ於テ第七號第八號
 第九號証ノ如キ証書ヲ出スハ何ヲ証トシテ該証ヲ製シ得ヘキヤト
 裁判セラレシハ不法ト思考ス

辨明

原裁判所ノ書類ヲ審按スルニ明治十三年二月廿日上告代言人カ口
 供第四項ニ「被告上告第三號第四號証ノ金ハ深川佐賀町二丁目三拾

五番地原告被上告人宅ニ於テ原告本人好川保兵衛へ相渡シ其節該証ヲ
 金ト引換ニ保兵衛ヨリ受取タリトアリ其第七項ニ「被告第五號第六
 號証ハ被告第一號第二號証ト共ニ原告米商店乃蠟壳町ニテ原告手
 代ヨリ受取タリトアリ明治十三年三月十五日ノ口供第一項ニ「被告
 第一號第二號証ノ金ハ該証引換ニ名前不知原告手代ノ者へ相渡タ
 リトアリ又明治十三年五月十四日ノ口供第二項ニ「被告第七號第八
 號第九號ノ買付米ハ蠟壳町原告店於テ該証日附ノ都度買付ノ約束
 ナ成シ云々トアリ抑限月米ノ賣買ハ必ラス仲買ニ依頼シ米商會所
 於テ賣買ナルモノニシテ仲買ハ仲買店アリテ以テ客ノ依頼ニ應
 スルモノナリ左スレハコソ上告人ハ明治十一年二月十五日ヨリ二
 月十八日迄蠟壳町ナル被上告人カ仲買店ニ就テ第五號乃至第九號
 証ノ如ク買付ヲ爲シタルニ非スヤ而シテ其仲買店ニ於テ該買付書

テ上告人へ渡シタルハ被上告本人ニ非スシテ被上告人カ雇人ニモ
 セヨ其雇人ハ被上告人カ代理者ニシ代理者ノ爲シタル事柄ハ被上
 告本人カ負擔スルモノナルニ付其雇人ニ依頼セシハ被上告人ニ依
 頼セシト同一理ナレハ明治十一年二月十九日ニ至リ其仲買店ヲ闔
 キ殊更ニ被上告本人ノ別宅ニ就テ第五號乃至第九號証買付米証據
 金ノ延期ヲ求メ又ハ買付米ヲナスノ道理ナキノミナラス証據金ノ
 受取書タルヤ第一號第二號証ニ於ケルカ如ク必ラス証券印紙ヲ貼
 付スベクシテ之ヲ貼付スルハ商業上仲買人カ當務ノ事柄ナルニ付
 若シ被上告人カ深川ノ別宅ニ於テモ蠣殻町ナル仲買店ニ於ケルカ
 如ク証據金ノ授受ヲナスモノナランニハ必ス証券印紙ヲ備ヘ置カ
 サル可カラス然ルニ第三號第四號証ニハ証券印紙ヲ貼付セス剩仲
 買人カ當務ノ事柄即チ証券印紙貼付ソコチ却テ客方即チ上告人ニ

負ハシムルカ如キノ所爲ハ商業上アルコトハ推考シカクシ況ンヤ
 第三號第四號証ハ第一號第二號証ト同シク証據金ノ受取書ナルニ
 其用紙モ其文体モ同一ナラス且其執筆ハ何人ナリヤ之ヲ証明スル
 能ハスト云フニ於テチヤ左ニハ第三號第四號証ニ押捺シアル印
 影ノ被上告人カ印判ニ相違ナキノミチ以テ第三號第四號証ハ証據
 金ノ受取書トシテ被上告人カ渡シタルモノト見做ス可カラス既ニ
 第三號第四號証ハ証據金ノ受取書トシテ被上告人カ渡シタルモノ
 ト見做サル上ハ上告人ハ第三號第四號証ヲ以テ六百貳拾五圓ノ
 証據金ヲ渡シタル証トスルヲ得ス第三號第四號証カ六百貳拾五圓
 ノ証據金ヲ渡シタル証トナラサルニ於テハ他ニ六百貳拾五圓ノ証
 據金ヲ渡シタル証ナキニ付上告人第一號第二號証ニ記載アル三拾
 五圓ノ外証據金ヲ渡サルモノナルニヨリ第五號乃至第十號証ノ

買付米ハ第一號第二號証明文ノ如ク賣買戻ヲナスハ當然ノコナレ
 ハ本訴ノ買付米ハ被上告第十七號乃至第十九號ノ帳簿ニ記載ノ通
 リ賣買戻ヲナシタルモノト原裁判所カ信認シ上告第三號第四號証
 ナ証據金ノ受領証ト見認メサリシハ當テ得タル裁判ナリトス
 但上告第十三號証ノコハ原裁判所へ申立サリシニヨリ辨明スル
 ノ限リニ非ラス且上告要領第二條第三條第四條ハ本按破毀ヲ求
 ムルノ資料トナスニ足ラス而シテ其事柄タル本條辨明中ニ就テ
 自ラ了解ヲ得ヘキニ付一々辨明セス
 右辨明ノ如クナルヲ以テ東京上等裁判所ノ裁判ヲ破毀スヘキ理由ナ
 キモノトス

第二百八十號

○判文明治十三年七月廿六日上告
 明治十三年十月十八日申渡

岩手縣陸中國東和賀郡

上鬼柳村六十番地平民

菅原興六代言人

東京府京橋區南樞町七

番地寄留高知縣士族

上告人

上 島 重 威

岩手縣陸中國東和賀郡

上鬼柳村三十三番地平

民

被上告人

千 田 儀 兵 衛

預リ金返還証書取戻ノ詞訟宮城上等裁判所ノ裁判ヲ不當トシ上告シ
 テ破毀ヲ求ムル要領左ノ如シ

第一條

宮城上等裁判所判文第一條ノ主旨ハ初審原告^{〔上告者〕}代人大石齊民ノ口供中被告^{〔控訴原告即チ〕}ハ何等ノ心思アルヤ該証^{〔被上告第一號証〕}即控訴原告第一號証^{〔號〕}ハ明治二年十月被告^{〔控訴原告即チ〕}ニ於テ原告^{〔被告〕}宅^{〔持來リテ投出シ〕}歸宅セリ然ルニ原告ハ何心ナク該証ヲ其儘仕舞置キタルヲ明治十二年一月中旬ニ差戻シタリトアルヲ以テ被上告第一號証ハ原被承諾上明治二年ヨリ明治十一年迄十個年間質地受戻ノ延期ヲ約シタルノ証ト認定セラレタルニアレドモ該証書ハ假令双方承諾上ヨリ成立チタルモノトスルモ上告者ハ上告第五號証^{〔控訴被告〕}明治十二年五月十日ノ約定書ノ如ク勸解廳ニ於テ論地ヲ上告者ノ所有トシ被上告者^{〔賣戻シ〕}チ約シタルモノナレハ其期限内被上告者ニ於テ論地ノ買戻チナサ、リシヲ以テ其所有權ハ全ク上告者ニ歸シ曩ニ

結ヒタル延期ノ約定ハ無効トナリタルヲ論チ俟タサルモノナリト

第二條

同判文第二條ノ主旨ハ本訴被上告者ヨリ上告者^{〔差入タル金員〕}ハ質地代金ノ内^{〔授受シタルモノ〕}ト認定セラレタルニアレドモ該金員ハ初審原告^{〔上告者〕}ノ口供ニアル如ク被上告者ハ有合質ノ返金トシテ渡サントシ上告者ハ別途貸金ノ内^{〔受取ント欲シ〕}紛議一決セサルヨリ始ラシ預リ置キタルモノニテ有合質ノ返金ト決定シタルモノニアラス倘シ有合質ノ返金トシテ受取タルモノナレハ其受取証ヲ渡スヘキ筈ニテ被上告第二號証ノ如キ預リ金証書ヲ授受スルノ理ナシ右ノ如ク該預リ金ノ紛議一決セサルヨリ後チニ阿部要治ノ仲裁ニ依リ該質地ヲ折半スルノ約ヲ結ヒ地券証ヲ双方^{〔分配セシ〕}處

被上告者於テ該約定ヲ違變シタルニ由リ上告者ハ阿部要治ハ係リ地券取戻シ義勸解出願ニ及ヒ被上告者モ引合トシテ召喚セラレ遂ニ前第一條ニ陳述セシ如ク上告第五號証^{〔控訴被告〕}第五號証^{〔控訴被告〕}ノ約定ヲ取結フニ至リタルヲ以テ見レハ該預リ金ハ當時有合質ノ返金トシテ受取タルモノニアラサルヲ明瞭ナリ然ルニ漫リニ之ヲ有合質ノ返金ナリト認定セラレタルハ不當ノ裁判ト思考ストノコ

第三條

同判文第三條中ニ^{〔被告〕}即^{〔控訴被告〕}上告者^{〔控訴被告〕}カ初審ノ口供ニ明治十二年四月被^{〔控訴原告即〕}上告者^{〔控訴原告即〕}カ強情ナル申分ニテ終ニ夫レヨリ被告^{〔控訴原告即〕}ニ於テ耕耘ヲ爲シ居レリトアレハ明治十二年四月中被告^{〔控訴被告即〕}カ該田地ヲシテ原告^{〔控訴原告即〕}ニ引渡シタリシ情况ハ見ルヘキモノアリ而シテ原告^{〔同〕}カ強情ヲ以テ之ヲ掠奪シタルノ証左アルニア

ラサレハ該地ハ被告^{〔控訴被告即〕}カ原告第三號証ノ契約ヲ履行シテ承諾上之ヲ返還セシヤ又明カナリトアレハ被上告者カ本訴ノ論地ヲ掠奪シ強情ニ耕耘セシコハ其証ヲ舉クル能ハサルモ上告者カ該地所ヲ被上告者ヘ引渡シタルハ上告第五號証^{〔控訴被告〕}第五號証^{〔控訴被告〕}明治十二年五月十日賣買ノ約定ヲ取結ヒタル時ニ在リテ決シテ明治十二年四月中ニ引渡シタルニアラス而シテ該地所ノ賃租諸入費ハ現今ニ至ル迄上告者ニ於テ之ヲ勤メシコヲ知レハコソ被上告者ニ於テ一旦上告者ヨリ引渡ヲ受ケタル土地ノ賣買契約ヲナシタルニアラスヤ是ニ由リ之ヲ觀レハ上告者カ宮城上等裁判所ニテノ口供ヲ採用セラレス初審ノ口供ヲ引証セラレ被上告者カ該地所ヲ強情ニ耕耘セシニアラスト認定セラレタルハ不當ナリ又同條判文中ニ^{〔若シ之レカ被告ノ申供スル如ク折半ノ契約ナリシ者トセハ其半ナル二筆ヲ}

記ス可キニ三筆ノ記シアルト其引渡シテ做シタル田地モ亦貳筆ナル可キニ然ラスシテ四筆ノ地所ヲ引渡シタルトニ依リテ見レハ原告第三號証ニ地券狀三葉トアルハ實際被告カ一葉ヲ誤脱シタルモノニシテ原告モ亦漫然之ヲ領置シタルモノト看做サルナリトアレヒ該折半ノ口約タルヤ固ヨリ地券証ノ紙數ヲ折半シテ二葉宛ヲ領置ストノ口約ニアラスシテ土地ノ肥瘠ト廣狹ヲ以テ之レガ價格ヲ定メ其價額ヲ折半スルノ旨趣ナリ抑一箇ノ土地ヲ折半スレハ双方同一ノ面積ニ分割スルヲ容易ナレト本訴論地ノ如ク數箇ニ分レタル土地ハ一步モ違ハサル様ニ分割セントスルモ實際ナシ得可ラサルカ故ニ上告者ハ土地ノ肥饒ナル處ニテ少數ノ反別ヲ受取リ被上告者ハ瘠地ニテ多數ノ反別ヲ受取ルコトニ約シタルナリ是ヲ以テ上告者カ所有スヘキ一筆ノ地代價ハ五拾壹圓七拾

四錢五厘ニシテ被上告者ノ所有ス可キ三筆ノ地代價ハ合計六拾四圓六拾六錢貳厘ナレハ地券ハ一葉ト三葉ノ差アルモ其代價ハ概不相半セリ然ルニ原裁判所ハ反別ノ多少地價ノ高下ヲ顧ミテ前ニ掲ケル如ク地券ノ紙數ヲ折半セサルト云フヲ以テ被上告第三號証ニ字寺田ノ一筆ヲ書加ヘサルハ誤脱ナリト認定セラレタルハ不當ノ裁判ナリト思考ストノコト

第四條

同判文第四條ノ主眼タルヤ上告者第五號(控訴被告)証ニシテ被上告者ノ錯誤ニ出テタルモノト認定サレタルニ該証書ハ勸解裁判所ノ控所ニテ之ヲ認メ裁判官ノ檢閲ヲ請ヒタルニ文中地元相場ヲ以テ買受ケ可申ト云フ文字ハ後日紛議ヲ生シタルニ元直段ト解釋スルノ恐レアレハ改書ス可シトノ説論ニ基キ原被示談ノ上地元ノ二字

ヲ貼付シ村内ト被上告者自ラ之ヲ改書シテ實印ヲ押捺シ被上告者
 三渡シタル分ハ上告者之ニ押印セリ斯ノ如ク鄭重ナル受授ニ係ル
 モノニシテ加之今回本件上告ニ付上告者カ提出スル上告號外第一
 號第二號証ノ如ク曾テ被上告者ヨリ上告者へ對シ上告第五號証ノ
 契約ヲ履行セシメテ督促シタルノ証アレハ是レ決シテ錯誤ニ出タ
 ル証書ニアラズ然ルヲ原裁判所ハ折半ノ口約ヲナシタルモノナシ
 テ全部ヲ買得スルト云カ如キ不利ナル契約ヲナス可キ理由ナキモ
 ノニシテ該証據ハ無原因ヨリ成立シタル者タレハ其証書ノ効其契
 約ノ力アラザルモノトセラレタルハ不當ナリ如何トナレハ上告者
 カ口約ニテ可受取寺田ノ地所ハ地質肥饒僅カ一反四畝拾壹歩ノ
 反別ニテ地券代價五拾壹圓七拾錢餘ノ價額アリ被上告カ可受取土
 地ハ地質粗惡ニシテ反別二反壹畝廿四歩アルモ代價ハ六拾四圓六

拾六錢ナリ故ニ該四筆ノ内原被共其望ム處ハ則チ寺田ノ一筆ニ
 アリテ之ヲ分割スルモハ價額ハ頗ル減少スルカ故ニ被上告者ハ勘
 解廳ニ於テ斯ノ如ク遠隔ノ地ニ在ル粗惡ノ土地ヲ無代價ニテ受取
 モ其利益ナキトテ察シ寧ろ全部ヲ村内ノ相場ニテ購得スルヲ利益
 ナリト認テ該契約ヲナシタルモノナレハ決テ之ヲ無効ノ契約ト云
 フ謂レアル可ケンヤ然リト雖モ假リニ被上告者ノ陳述ノ如ク該証
 書ニテ錯誤ナリトセシカ其錯誤ナリトスルニハ折半ノ約ヲシテ眞
 正トナサレハ錯誤ノ原因生ス可キ理由ナシ故ニ原裁判所モ其半
 高ナシテ無代價ニテ讓與セラルト又全部ヲシテ相當代價ニテ買
 得スルトハ其損益果シテ幾許ソヤ云々ヲ錯誤ノ原因トナシタルニ
 アラスヤ果シテ然ラハ假令上告者第五號証ヲ錯誤ヨリ出テタルモ
 ソトスルモ乃チ折半ノ約ヲ履行セサル可ラス况テ該証ノ錯誤ニ出

タル原因ナキニ於テチヤ之ニ依テ是ヲ視レハ該第五號証ハ正意ニ出タル契約ナレハ被上告者ハ該地ヲ買戻シ得ルノ期限ヲ失シ上告者ノ所有ニ歸セシメタルナリ然ラハ被上告者ヨリ預リタル金額ハ變ニ陳述スル如ク不決定ノミナルニ付之ヲ返還シ被上告者ノ所持ナル預リ証書ヲ取戻スハ當然ナルニ原裁判所ハ判文第五條ニ於テ「被告カ預リ金ヲ返還シ原告第二號証ヲ取戻サントノ要求ハ相立ザルモノナリ」ト擯斥サレタルハ不當ノ裁判ト思考ストノ「

辨明

第一條

上告要領第一條ノ主意ハ被上告第一號証質地受戻延期ノ約定書ハ假令双方承諾上ヨリ成立チタルモノトスルモ上告第五號証論地賣買ノ約定ニ依リ無効トナリタルモノナリトノ陳述ナレハ其上告第

五號証ハ後ノ第四條ニ辨明スル如ク其効チ有セサルモノナレハ之ヲ以テ被上告第一號証質地受戻延期ノ約定ヲ無効ナラシメタルモノトスルヲ得サルノ條理ナリトス

第二條

上告要領第二條ノ主意ハ被上告第二號証書ニ記載シタル金員被上告者ハ有合質ノ返金トセントシ上告者ハ別途ニ被上告者ニ貸金アルヲ以テ其内ニ受取ラント欲シテ紛議一決セサルヨリ姑ク預リ置キタルモノニテ有合質ノ返金ト決定シタルモノニアラテ而後上告第五號証ノ約定ヲ取結フニ至リタルヲ以テ見レハ該預金ハ當時有合質ノ返金トシテ受取タルニアラサルヲ明瞭ナリト云フニ在レハ其別途ニ貸金アルノ證據ナケレハ即チ該金額ハ質地ノ返金ニ當レルモノト見做スヘキハ當然ナリトス故ニ原裁判所カ本訴被上

告者ヨリ上告者へ差入タル金員ハ質地賃借金ノ爲メニ授受シタル
モノト認定シタルハ不當ノ裁判ニアラズトス

第三條

上告要領第三條ニ被上告者カ本訴ノ論地ヲ掠奪シ強情ニ耕耘セシ
コハ其証ヲ擧クル能ハサルモ上告者カ該地所ヲ被上告者へ引渡シ
タルハ明治十二年五月十日。告第一號証賣買ノ約定ヲ取結ヒタル
時ニ在リテ決シテ明治十二年四月中ニ引渡シタルニテ云々申
立ルト雖モ該地ヲ明治十二年四月ヨリ被上告者ニ於テ現ニ耕作シ
タルコハ上告者カ初審ノ口供ニ自陳スル處ニシテ其被上告者カ耕
作スルヤ該地ヲ掠奪シタルノ証憑スルニアラス然レハ該地ハ明治
十二年四月中上告者ヨリ被上告者へ承諾上引渡ヲ爲シタルモノト
見做サ、ルヲ得ズ故ニ原裁判所カ明治十二年五月十日賣買ノ約定

ヲ取結ヒタル時ニ論地ヲ被上告者へ引渡シタルト云フ上告者ノ口
供ヲ採用セスシテ曾テ上告者カ初審ノ時ニ爲シタル口供ニ依リ明
治十二年四月ヨリ該地ヲ被上告者カ耕作シタル事實ヲ認め該地所
ハ上告者カ承諾上之ヲ被上告者へ返還シタルモノナリト認定シタ
ルハ不當ノ裁判ニアラストス又々該地所折半ノ口約タルヤ固ヨリ
地券証ノ紙數ヲ折半シテ二葉宛ヲ領置スルト云々口約ニアラスシテ
土地ノ肥瘠ト廣狹ヲ以テ之レカ價格ヲ定メ其價額ヲ折半スルノ旨
趣ナリ云々地券ノ紙數ヲ折半セサルト云々夫以テ被上告第三號証
ニ字寺田ノ一筆ヲ書加ヘサルハ誤脱ナリト認定セラレタルハ不當
ノ裁判ナリト云フト雖モ本訴論地ヲ折半分取スルノ契約ヲ爲シタ
ルト云フハ上告者ノ口頭ノ陳述ニ止リ憑ルヘキ又証左ナク固ヨリ
被上告者ハ之ヲ承認セス然レハ該証ハ本訴ニ關スル地所折半ノ契

約主爲シタルコトヲ証スルニ足ラサルモノトス何トナレハ該地ハ四筆トモ其質地受戻ノ延期限内ニ在テ其返金ヲ授受シタルモノナルコトハ前第一條第二條辨明ノ如クナルヲ以テ假ニ被上告第三號証ニ字寺田ノ地一筆ヲ記載セサルハ誤脱ニアラサルモノト見ルモ唯是レ被上告第三號証ハ他ノ三筆ノ地ヲ記シタル証書ナリト云フ可キノミ之レヲ以テ該地折半ノ約アリシモノト推測シ得可キ端緒トスルニ足ラス其他別ニ寺田ノ地一筆ハ上告者ノ所有ニ歸ス可キ憑証モ理由モアルコトナクレハナリ然リ而シテ本訴ノ關スル地所四筆トモ既ニ被上告者カ引渡シテ受得テ現ニ耕作スルノ事實ヲ推ゼズ被上告第三號証ニ字寺田ノ地一筆ヲ記載セサルハ誤脱ノ外ナシル可キヲ以テ被上告第三號証ニ地券三葉トアルハ則其一葉ヲ誤脱シタルモノト原裁判所カ認定セシハ之ヲ不當ト爲スヲ得サルモノトス

第四條

上告要領第四條ノ主意ハ上告第五號証ハ鄭重ナル手續ヲ以テ授受シタル証書ナリ而シテ上告號外第一號第二號証ノ如ク曾テ被上告者ヨリ上告第五號証ノ契約ヲ履行セシコトヲ督促シタルノ証アリテ上告第五號証ノ契約ハ被上告者ノ錯誤ニ出テタルモノニアラス且ツ論地折半ノ契約ヲ爲シタル後更ニ該上告第五號証ノ契約ヲ爲シタルノ理由ハ上告者カ受取ル可キ一筆ノ地所ハ地質肥饒ニシテ被上告者カ受取ル可キ三筆ハ遠隔ノ地ニ在ル粗惡ノ地所ナルヲ以テ被上告者ハ此粗惡ナル三筆ノ地所ヲ無代價ニテ受取ルヨリ寧ろ全部ヲ相當ノ代價ニテ買得スルニ若カスト認メテ該上告第五號証ノ契約ヲ爲シタルモノニテ無原因ノ契約ニアラサルハ決シテ之

無効ノ契約ト云フ可カラス又々假ニ上告第五號証ヲ錯誤ヨリ出
 テタルモノトスルモ折半ノ約ヲ履行セサル可カラスト云フト雖モ
 上告第五號証ハ假令鄭重ナル手續ヲ以テ之ヲ授受シタルニモセヨ
 前第二條ニ辨明スル如ク本訴ノ關スル地所ハ之レカ返金ヲ爲シタ
 レハ質地タルコト免カレ當然被上告者カ所有地ナルニ付此地ヲ別
 ニ代金ヲ以テ被上告者カ買ラ可キノ理ナキカ故ニ該上告第五號証
 ノ契約ハ全ク無原因ニ屬シ被上告者ノ錯誤ニ出テタルモノト見做
 サルヲ得ヌ又該地折半ノ約アリシモノト認メ難キ理由ハ前第三
 條ノ辨明ニ依テ知了ス可シ其他上告號外第一號第二號証ハ原裁判
 所へ提出セサルモノナルヲ以テ之レニ對シテハ辨明ヲ與フルノ限
 ニアラス又々原裁判所ノ判文第四條ニ該地ハ明治元年中既ニ流地
 トナリタルモ明治十二年四月中阿部安治カ取扱ヲ以テ折半ノ契約

ヲ遂ク其折半ノ地所ハ無代價ニテ原告へ讓與スルノ約束ナリシト
 ハ被告カ自ラ明言スル處ナラスヤ然ラハ原告ニ於テハ其半高フシ
 テ無代價ニテ讓與セラルハト又全部ヲシテ相當代價ニテ買得スル
 トハ其損益果シテ幾許ソヤ人誰カ益ヲ捨損ヲ求ムル者アラシヤ是
 レ被告ノ言フ處ニ依ルモ原告ハ其無代價ヲ以テ受取り得ラル可キ
 田地ヲ相當代價ヲ以テ買取スルノ損ヲ取リタル者ナリ況ンヤ原告
 ハ唯ニ取戻シ得可キ田地ナルヲ云々トアル其主旨ヲ究ムレハ曾
 テ折半ノ約アリシ地ヲ更ニ買受ケントスルヲ以テ上告第五號証ヲ
 無原因ナル錯誤ノ契約ナリトシタルニアラス假ニ上告者ニ於テ折
 半ノ約アリタリトスル等ノ陳述ニ依テ之レヲ見ルモ被上告者カ其
 無代價ニテ受取ル可キ半分ノ地所ヲ代價ヲ出シテ買取ル可キ理ナ
 キヲ説明シタルモノニテ其無原因ト爲シタル主點ハ折半云々ノ

ニアラヌシテ該地ハ悉皆被上告者カ代價ヲ出サスシテ取戻シ得ヘ
 キ地ナルヲ故ラニ買受クルノ契約ヲ爲ス可キ理ナク乃チ無原因ニ
 屬スルヲ以テ錯誤ノ契約ナリトシタルコトハ右ノ判文中(是レ被告
 云フ處ニ依ルモ云々)又々(況ンヤ原告ハ唯ニ取戻シ得可キ田地ナ
 ナヤ云々)トアルニ依テ明ラカニ知ラルハナリ然レハ上告者云
 カ如キ折半ノ約ヲ履行ス可キ理ナキハ言テ候タサルモソトス故
 原裁判所カ上告第五號証ハ無原因ヨリ成立サタルモノナレハ其証
 書ノ効其契約ノ力アラサルモノトシ上告者カ預リ金ヲ返還シ被上
 告第二號証ヲ取戻サントノ要求ハ相立サルモノナリト判決シタル
 ハ不當ノ裁判ニアラストス

前條
 前條ノ理由ナルヲ以テ宮城上等裁判所ノ裁判ヲ破毀スルキヒアラ

サレモノトス

第二百八十一號

明治十三年八月三十一日上告
 明治十三年十月十九日申渡

廣島縣安藝國高田郡三

田村六百六十六番地平

民前田代三郎代理人

東京府神田區淡路町一

丁目一番地平民

上告人

林 和 一

廣島縣安藝國高田郡三

田村六百五十四番地平

民

笹ヶ原山妨碍一件大阪上等裁判所ノ裁判ヲ不當トシ上告シテ破毀ヲ求ムル要領左ノ如シ

第一條

大阪上等裁判所判文第一條ニ(被告)上告(者)於テ被告第三號証八右衛門ノ印影ハ四代前八右衛門ノ印章ヲ讓受ケ相用ヒタル旨陳述スレトモ三代前八右衛門ニ於テハ別ニ印章有之旨原告(被告)上(告者)伸供シ其証佐トシテ文政八年前後ニ掛ル則チ八右衛門ノ印影アル原告第五號及ヒ第七號証ヲ供出シ云々トアレトモ上告(被告)第三號証ニ記載アル三代前八右衛門名下ノ印影ハ四代前八右衛門ノ印章ヲ讓受ケシモノナリ元來戶主カ其家代々ノ通り名ヲ稱ヘ且先代ノ印章ヲ讓受ケ其儘押用スルノ習慣ハ世間比々其例アルコトニテ現ニ被上告者ノ三代前八右衛門ニ於テモ先代ノ通稱ニ改メ其印章ヲ襲用シタルモノニテ爰ニ被上告者(原告)上告第一號及ヒ第二號証ニ記載タル八右衛門ノ名下ニ押捺シタル印影ハ四代前八右衛門ノ真正ナル印影ナリト看認メタルハ三代前八右衛門カ別ニ印章有之トノ確乎タル証據アラサル限りハ唯被上告第五號第七號証八右衛門ノ名下ニ角長ノ印ヲ押捺シタルモ是等ノ証書ハ皆公正ノ証書ニアラサルヲ以テ三代前八右衛門カ四代前八右衛門ノ印章ヲ讓受ケタルニアラサルノ証據ト爲スニ足ラザルモトト思考ス

第二條

同判文同條中ニ(該証ニ連署シ組頭并ニ証人等ノ印影相違アル以証佐トシテ原告第八號第九號証ヲ供出セ云々)トアレトモ上告第三號証ニ連署シタル組頭并ニ証人ノ印影ハ何レノ點ニ相違シ廉アルヤ

説明セラレヌ且其印影ニ就テ原被ノ間ニ紛議ヲ生シタル上ハ鑑
 定者ヲシテ該証ヲ鑑定セシメラルレハ其真偽判然スヘキニ之ヲ鑑
 定セシメラレヌ殊ニ被上告者ノ提供セシ第八號第九號証ハ如何ナ
 ル憑據アリテ真正ナル証書トスルニ足ルヤモ明示セラレヌ直チニ
 上告者ノ提供シタル第三號証ニ連署セシ組頭及証人ノ印影ハ之ニ
 相違スルトノ判決ヲ下サレタルハ不當ノ裁判ナリト思考ス
 第三條
 同判文同條中ニ被告ハ只四代前八右衛門ノ印章三代前八右衛門於
 テ讓受ケタルトノ陳述シ他ニ其言ヲ証明スル憑據之レヲケレハ
 右八右衛門於テ被告第三號証而已該印押捺スル理由無之ニ付眞
 正ノモノトハ認メカクシトアレハ第一條ニ開陳セシ如キ理由ニシ
 テ四代前八右衛門ノ印章ヲ三代前八右衛門ニ於テ押用シ同人ニ於

テ更ニ事實印ヲ新調シタルノ憑據ナキ上ハ四代前八右衛門ノ印章
 亦上唇第三號証三代前八右衛門ノ名下ニ押捺シタルハ則チ之ヲ讓
 受ケタルノ確証ナリ而シテ上告者ニ於テハ別冊証書寫ニ掲載セシ
 如ク三代前八右衛門カ先代ノ印章ヲ讓受ケ之ヲ押捺シタルハ上告
 第三號証ニ限ラズ猶其他ニモ之レアルヲ証明センカ爲メ文政六
 年文政八年天保二年度ノ証書三通ヲ捧呈セシ處第四號第五號第六
 號番號ヲ付セラレ且ツ法官ノ檢印モ押捺セラレタリ乃チ三代前
 八右衛門カ上告第三號証ニ先代ノ印章ヲ押捺シタルニアラハ
 ルヨ明白ナリ然ルニ無謂該第四號第五號第六號証ヲ棄却セラ以前
 掲揭シタル如ク判定セラレシハ不當ノ裁判ナリト思考ス
 辨明
 本訴上告ノ主點ハ上告第三號証ニ記載シタル三代前八右衛門名下

之印影ハ四代前八右衛門ノ印章ヲ讓受ケ之ヲ押捺シタルモノニテ
 該証ハ固ヨリ真正ノ証書ナリ而シテ三代前八右衛門カ四代前八右
 衛門ヨリ讓受ケタル印章ヲ押用シタルハ上告第三號証ノミニアラ
 スシテ其他ヨモ猶之レアルコトヲ立証スル爲メ上告第三號証ト同
 又印章ヲ押捺シタル上告第四號五號六號又三証ヲ提供シタルニ原
 裁判所カ右ノ三通ノ証書ヲ採用セサルノ理由ヲモ説明セズ其判文
 第二條ニ於テ「被告」者「上告」ハ只四代前八右衛門ノ印章ヲ三代前八右衛
 門於テ讓受ケタルトノニ陳述シ他ニ其事ヲ證明スル證據之レカク
 レハ右八右衛門於テ被告第三號証而已該印押捺スルノ理由之レ無
 キニ付真正ノモノトハ認メ難シト判決シタルヲ不當トスル事ナリ
 依テ原裁判所送致ノ書類ニ徵スルニ上告者ハ本訴訟地ヲ指テ自分
 ノ先代品次カ本家四代前八右衛門ヨリ讓受ケタル字笹ケ原山ナリ

ト主張シ被上告者ハ之ニ對シ論地ハ字伊勢山ト稱スル自己ノ所有
 地ニシテ四代前八右衛門カ品次ニ讓與シタル笹ケ原山トハ別種ノ
 山ナリ而シテ右品次カ讓受タル笹ケ原山ハ曾テ上告者ヨリ後幸要
 助ナルモノニ賣拂ヌリ其証ハ被上告第十三號証山地永代賣切証書
 ニ「所ハ竹代山ノ上ニ笹ケ原」トアリ依テ論地ハ舊來自分所有地ナリ
 ト抗辨セシモノナルカ上告者ハ右ノ被上告第十三號証ハ自分ヨリ
 後幸要助ヘ字金三郎山ヲ賣渡シタル証書ニシテ笹ケ原山ヲ賣渡シ
 タルコトアラズ該第十二號証ニ記載シタル笹ケ原ノ三字ハ被上告者
 カ要助ヨリ該証ヲ借受ケタル後チ故テニ加筆シタルモノナリト陳
 辨シタルモ其加筆タルノ証ナク其他該第十二號証ニ記載シタル山
 地ハ金三郎山ニシテ笹ケ原山ニアラズトスルノ憑據之レ無キ限リ
 ハ原裁判所カ其判文第二條ニ「被告」者「上告」於テ原告第十二號証ハ金三

郎山ヲ後幸要助ナル者へ賣却シタル証書ニテ笹ケ原ノ文字ハ原告
 以加筆ナル旨陳述スレトモ該証ノ手跡ニ依テ之ヲ視ルモ其文字加筆
 セシモノトハ認メ難シ果シテ然ラハ品次カ譲リ請ケタル笹ケ原山
 ハ被告於テ賣却セシモノニテ論地ハ笹ケ原山ニ之レ無キト明瞭ナ
 レハ被告ノ中分相立タスト判決シタルハ不當ノ裁判ニ非スト夫
 レ斯ノ如ク論地ハ笹ケ原山ニアラサルト明瞭ナレハ之ヲ被上告者
 ノ所有地ナリト斷定スヘキハ當然ニシテ本訴争訟ノ理非既ニ判然
 タル然レハ上告者ヨリ三代前八右衛門カ四代前八右衛門ヨリ讓受
 ケタル印章ヲ押用シタルハ上告第三號証ノミトアラサルノ証トシ
 テ差出シタル上告第四號五號六號証アルコトモ拘ハラズ原裁判所カ
 三代前八右衛門於テ上告第三號証而已四代前八右衛門ヨリ讓受
 ケタル印章ヲ押捺スルノ理由カシト判決シ上告第四號五號六號証

ハ以テ上告第三號証ヲ真正ノ証書ト認ムヘキ証據トナスニ足ラサ
 ルヤ否ヤヲ説明セサカシハ稍穩當ナ欠モノ有リト雖モ右ハ本按ニ
 影響セサルヲ以テ破毀スルノ限リニアラストス
 但シ其他上告ノ點ハ都テ支葉ノ論ニ屬スルヲ以テ辨明ヲ與ヘス

判決

右ノ理由ナルヲ以テ大阪上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘカラサルモノ
 ナリ

第二百八十二號

○判文明治十三年九月廿二日上告
 明治十三年十月十九日申渡

茨城縣常陸國河内郡岡
 見村四十八番地平民

上告人 川村 佐七

右代言人東京府深川區

佐賀町三丁目三十二番

地寄留茨城縣士族

鴨志田直

茨城縣常陸國河内郡岡

見村四十八番地平民川

村喜太郎後見人

被告

川村テタル

地所引渡二件東京上等裁判所ノ裁判ヲ不當トスル上告ノ主點ハ左ノ如クアリトスルニ於テ被告ハ被告ノ主張ニ依リテ該証ニヨリ上被上告第十二號及ヒ第十四號証ニ被上告者ニ於テ上告者ヲ入籍セシムルニ當リ成立タルモノナリト論シタルノミニテ該証ニヨリ上

告第一號証ノ契約ヲ解除シタリトノ申立ヲナシタルコトナカリシノミナラズ証書文中ニ川村喜太郎方所有田畑山林云々隱居佐七ニ於テ差構不致トアルハ要スルニ上告者ハ被上告ノ家政ニ關係セスト云フニ止リ上告第一號証ノ効力即チ上告者カ所有シ得ヘキ財産ヲモ差構ハスト云フノ意義ニアラサルニ付被上告第十二號第十四號証ハ上告第一號証ニ毫モ關係ナキモノトス然ルチ東京上等裁判所ニ於テ被上告第十二號第十四號証ニ依リ上告者第一號証ヲ消滅シタルモノト判決セラレシハ不當ノ裁判ナリトノ事

因テ辨明并ニ判決ヲ與フル左ノ如シ

上告者ニ於テ上告第一號証ト被上告第十二號第十四號証トハ關係ナキモノナル旨申立ルト雖モ上告第一號株分ケノ契約ヲナシタル

後子其父子ノ間ニ於テ紛議ヲ生シ之レカ爲メ其契約ヲ履行スル能
 ハサリシモノトナルモ勘左衛門ノ子仙之助（後子勘左衛門ノ代ニ至リ
 門ト稱ス）テハ勘左衛門モ既ニ飯村セルニ付同人等ニ對シ速カニ之レカ履行
 ヲ爲サシムルニキ筈ナリト然ルニ仙之助生存中ハ上告人ニ對シ奉
 養ヲ盡シタルニ付強テ株分ケヲナスヲ要セサリシニヨリ其履行在
 苒延引ニ及ビタルニモセヨ初メ該財産ハ勘左衛門ノ所有ナルカ故
 ニ之レト契約ヲ結ビタルニ非スヤ然ルニ其後所有者變更シテ仙之
 助トナリ被上告人トナルノ場合ニ於テハ相續人ナシテ其相續スル
 所ノ財産中ニハ上告第一號株分ケヲ約シタル財産混淆シアレトヲ
 知得セシムルハ事實ニ於テ上告人カ爲サレハカテサルノ手續ナ
 リトス然ルニ上告人ハ仙之助及ヒ被上告人カ順次財産ヲ相續スル
 ヲ默視シタルヲ視レハ事實ニ於テ上告第一號契約ノ効力ハ已ニ消

滅シテ履行スヘカラサルノ理由アルカ故ナルニシト推測スルニ足
 レリ況シヤ被上告人カ繼襲シタル場合ニ於テハ啻ニ默視シタルノ
 ミナラス被上告第十二號第十四號証ノ如ク被上告人カ財産ニ付テ
 ハ差構ハサル旨ヲ盟約セルニ於テヤ然ルニ上告人ハ右差構ハス
 トハ被上告人ニ屬スル財産ノミチ差構ハスト云フノ意義ナル旨主
 張スレト万延年度以來川村家財産ノミチ付テハ紛議ヲ生シ上告第
 一號証ノ如キ結約ヲナス程ノ始末ニ至リタル末ナレハ被上告人カ
 財産ニ付テハ上告人カ最モ注意スル所ニシテ緩漫ニ看過セサルヘ
 キ所ナリ然レハ則チ苟モ其財産ニ付被上告人ト被上告第十二號第
 十四號証ノ如キ事柄ヲ結約スルノ場合ニ於テ上告第一號証ノ効力
 ヲ享得セントノ意アラハ必ラス其當時ニ於テ之レカ履行ヲ要スル
 カ若シ然ラサルキハ被上告第十二號第十四號証中ニ於テ上告第一

號証ノ財産アルヲ掲出セサルヘカラス然ルニ上告人ハ是等ノ所
 爲ナクシテ被上告人カ財産ニ付差構致サヌト約シタルヲ視レハ其
 當時總テ被上告人カ所有シタル財産即チ上告第一號証ノ財産ヲモ
 包含シタルモノト看做サルヲ得ス因テ東京上等裁判所カ被上告
 第十二號第十四號証ハ上告第一號証ニ關係アルモノトシ上告人ノ
 請求不相立ト言渡シタルハ不當ノ裁判ニアラストス
 但上告人ハ原裁判所カ上告第一號乃至第五號番外第一號証ニ認
 ヲ印ヲ爲サハリシハ聽斷ノ定規ニ背キタル旨申立ルト雖モ右ハ
 訴訟ノ本案ニ關係ナキ事柄ニテ本案ノ裁判ヲ破毀スヘキ理由ト
 ナラズキモノニ非ス
 判決
 右ノ次第ナルヲ以テ東京上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナキモ

ノトス

第二百八十三號

○判文明治十三年九月廿九日上告
 明治十三年十月十九日申渡

山梨縣甲斐國西山梨郡

千塚村平民窪田多七代

上告人

東京府日本橋區本町壹

丁目五番地平民

柴田義一

山梨縣甲斐國東山梨郡

平等村平民

萩原光太郎

買取立木伐採妨碍一件東京上等裁判所ノ裁判ヲ不當トシテ上告スル要領左ノ如シ

第一條

判文第一節ニ苟モ他人所有地ノ中ニアル立樹ヲ以テ自家山林伐木ノ標準トナス可ラサルハ論ヲ竣タズ且第一號以下六號ニ至ル悉ク皆標準タルノ證據ナシト裁判セラレタレトモ第一號即チ賣買互換約定書ノ冒頭ニハ甚輔山松立木賣買トアリ同第二款ニ西南立木境ハ見通シノ印木ヲ以テ境界ト相定トアリ又同第七款ニ山上大木松壹本ハ相殘シ變取申間敷ト同第十一款ニ目今切取中ノ立木拾壹本ノ義ハ賣買約定外トアリテ該山林ノ内殘シ置クヘキ分ハ殊更ラニ判然之ヲ掲ケタレハ其餘ノ松立木ハ境界内ニシテ悉皆伐採スルコトヲ得ヘキモノタルヤ明ラケシ且ツ朱點第一號乃至第四號ノ場所ハ既

ニ伐木セシ事跡ニ就テ之ヲ觀ルモ當初約定ノ境界ハ墨點ニ非スシテ朱點ヲ以テ定メタリシモノナリト認メサル可ラス然ルニ標準タルノ證據ナシト裁判セラレシハ不當ナリトノ事

第二條 判文第二節ニ原告(即被訴原告)カ境界トナス墨點第壹號以下第十三號

ニ至ルノ標樹ハ各皮ヲ削リ印木ト書シ且ツ極印ヲ存セリト兩造ノ供述符合スル上ハ明白ナル證據ナリトス然ルニ被告(即被訴被告)ニ於テ該樹ノ皮ヲ削リ極印等ヲナセシハ原告(即被訴原告)カ竊カニ來リテ作ス所ナルヘシト思料シ山梨縣第四課ハ吟味願ニ及ヒシ等ノ事迹ヲ以テ偽造ニ係ルモノ、如ク供述スルモ之ヲ以テ偽造ノ證據ト云フ可ラサル旨判定セラレタレトモ是偽造ヲ証スル端緒ナルカ故ニ此事迹ニ遡ホリテ檢究スルハ果シテ墨點ノ正當ナラサルコトヲ審明

セラレキモノナリ然ルニ之ヲ審明スルヲ為サス朱點墨點兩立
スルカ如ク判定セラレシハ不當ナリトノ事

第三條

判文第三節ニ第一號ヨリ第二號ト順次見通スルハ見通ノ文字ニ適
當セサルニアラスト裁決セラレタルニ互換約定書ノ第二款ニハ西
南立木境ハ見通シ印木云々トアレハ一直線ニ見通スノ文義ナル
ヲ以テ不當ノ裁決ナリトノ事

第四條

判文第四節ニ抑此標樹ハ賣買約定第二款ニ西南立木境ハ見通シノ
印木ヲ以テ境界ト相定候事但見通木者逸々印判致置候也トアルニ
基クモノナレハ云々約定ノ時ニ於テ協議撰定極印セシモノト認定
セサル可ラサル旨判決セラレタルニ右但書ハ無効ノ記入ナルヲ以

テ被上告所持ノ約定書ニ記載セサルモノナリ殊ニ迭ニ印判致置候
也ト記入シアルヲ逸々印判致置候也トセラレタルカ如キハ粗漏不
當ノ判決ナリトノ事

第五條

判文第五節ニ樹木ハ死生各其形狀ヲ異ニスルモノナレハ削リシ木
皮切株ヨリ新シク見フルトテ強チ近日偽造セシモノト看做ス可ラ
ズトアレハ切株削痕ノ新古及松脂ノ硬軟ノ如キハ初審法官親シク
臨檢以上ニテ結約ノ當時極印ナシタルモノニアラスト認定セラレ
タルニ反對シ終審法官ハ單ニ思想ヲ以テ近日偽造セシモノト看做
ス可ラサル旨斷定セラレシハ不當ナリトノ事

依テ辨明及ヒ判決ヲ與フルヲ左ノ如シ

辨明

第一條

本件ハ買取立木伐採妨碍ノ詞訟ナリト雖モ被上告〔初審被告〕ニ於テ
 之カ伐採ノ故障ヲ唱フル所以ノモノハ最初賣買約定ヲ爲シタル西
 南境界ハ初審立會繪圖面ノ山上老松ノ後面ニ在ル石塚ニ起リ第一
 號墨點ヨリ第十三號墨點ニ終ルヲ以テ其墨點即チ賣買約定ノ境界
 外ニ係ルノ伐採ヲ許サスト云ニ在リ上告者〔初審原告〕ニ於テハ山上
 老松ヨリ第一號朱點ニ見通シ第六號朱點ニ至ルヲ以テ境界トナス
 ノ約定ナレハ謂レナキ妨碍ナリト云フノ爭論ニ歸着シ而シテ論所
 東北ハ約定書第二款東北小林勘兵衛持山ニ接スル境小木ノ分者惣
 テ相殘今回ノ約定外タルヘシト明記シ兩造相爭ハサル所ナルカ故
 ニ該山林西南ノ境界ハ朱點ナルカ將テ墨點ナルカヲ判定スルニ止
 マルモノトス因テ之ヲ約定書ト立會繪圖トニ照徴シ其境界如何ヲ

審究スルニ其約定書ノ冒頭ニハ舊正徳寺分内字甚輔山松立木賣買
 下アリ同第三款ニハ西南立木境ハ見通ノ印木ヲ以テ境界ト相定候
 事但見通木者逸々印判致置候也トアルヲ觀レハ之カ境界ヲ徵スヘ
 キモノハ印判ヲ押捺シタル標樹即チ印木ヲ以テ見通ノ境界ヲ定メ
 タルノ約定ナリト謂ハサルヲ得ス現ニ被上告者ノ境界ナリト主張
 スル墨點ノ標樹ニハ各々皮ヲ削リ印木ト書シ極印ヲ存シ上告者ノ
 指定ナル朱點ノ立木ニハ印書ナキ旨明言スルノミナラス其朱點第
 三號四號ノ立木ハ他人ナル佐野市之丈ノ所有地内ニ係ル立木ナレ
 ハ以テ本訴山林伐木ノ標準ト爲スヘキ理由ナシ且ツ上告者ノ朱點
 第六號ノ處ハ舊丸山舊落合ニ混入シ隨テ其東方ノ境界ハ舊丸山三
 枝喜子松ノ持山ニ接シ約定書第二款東北小林勘兵衛持山ニ接スル
 云々ノ明文ニ符合セサル等ノ不適當ヲ生スルニ依リ當初約定書ノ

境界ハ朱點ニアラシテ墨點ノ印木ヲ見通ス約定ナリト謂ハサル
可ラス然ルニ上告者ハ約定書第七款及第十一款ヲ援引シ殘シ置ク
ヘキ分ハ判然之ヲ掲ケタルハ其餘ノ松立木ハ悉ク伐採スルヲ得ヘ
キモノタル旨供述スルモ右第七款第十一款ニ掲ケ殘シ置クヘキ分
ハ墨點見通内ノ立木ナリト謂フヲ得可ク果シテ墨點朱點ノ間タニ
係ル立木ナリシヲ知ル可ラサル限リハ必ラスシモ之ヲ以テ朱點
見通内ヲ境界ナリト証スルニ足ラサルモノトス

第二條

上告者ニ於テ吟味願ノ一事ヲ以テ被上告カ標樹ノ印書ハ偽造ノ端
緒ナリト云フト雖モ徒々吟味願ヲ做シタルノミヲ以テ果シテ偽
造ヲ証スルノ端緒ナリト謂フ可ラヌ要スルニ上告者一個ノ思料ニ
過キサレハ則チ偽造ナリト定ムルニ由シオキモノトス而シテ被上

告云フ所ノ境界印木ハ約定書ニ適合シ上告者ニ於テ之ヲ排斥スル
ノ証明ヲ爲ス能ハサル上ハ上告者ノ主張スル朱點ハ自ラ境界タル
ヘキモノニ非スシテ愈々墨點ヲ以テ境界トスヘキハ論ヲ竣タサル
モ之トス

第三條

上告者ニ於テ約定書ノ第二款西南立木境ハ見通ノ印木云々トアル
文詞ハ一直線ニ見通ストノ意義ナリト云ヒ做スモ實際斯ノ如キ境
界ハ土地ノ形狀ニ因リ始終一直線ニ見通シ得ラルヘキ筈ナキノミ
ナラス現ニ立會繪圖面ニ照ラスモ上告者ノ境界線ナル朱點ノ位置
ト雖モ多少出入ナキヲ能ハサルヲ見レハ必ラスシモ一直線ニ見
通シタル境界ナリト斷言ス可ラス故ニ第一號ヨリ第二號三號ト順
次ニ見通スノ意義ナリトノ解釋ハ當タニ見通スノ文詞ニ當ラサル

第四條

非此ノミナラス善ク事實ヲ看破シタル見解ナリトス
 被上告所持ノ約定書第三款ノ但書ハ本文見通ノ印木トアルニ基ツ
 キ更ラニ其方法ヲ詳記シタル一項ニシテ被上告ヨリ上告者ニ受取
 リタル約定証書ニ記載シテレハ則チ被上告所持ノ証書ニ其但書ヲ
 記入シナキハ當時記入スルコトヲ漏脱シタルノミト認ムヘクシテ無
 効ノ記入ナリト謂フヘキノ理ナシ又上告人ニ於テ其但書ハ迭ニ云
 ヲトアリ逸々云々ト記入シナキヲ故ラニ終審法官カ誤認シタル旨
 供述スルニ依リ之ヲ其約定書ノ本紙ニ徴スルニ逸々ノ字体ハ行書
 ナリ以テ記入セルカ故ニ果シテ迭ニノ字ナルヤ將タ逸々ナルヤ分明
 ナラザルガ如クナルモ既ニ上告本人ニ於テ控訴答辨書ニ附シ自己
 ノ約定証書ノ寫ニ右但書ハ楷書ニテ逸々云々ト正寫シタルモノナ

控訴廳へ提出シ居ル上ハ上告代人ニ於テ今更ニ迭ニ云々ト記入シ
 アル旨供述スルモ上告本人カ既ニ已ニ逸々云々ノ字アリト自認シ
 テ提出シアルモノニ反異シ終審法官ノ誤認ナリト謂フ能ハサルモ
 ノトス

第五條

終審法官ハ約定書ノ明文ニ據リ事實ヲ認定シ毫モ定規法律ニ乖戾
 セシ裁判ヲ爲シタルニアラサレバ則チ其認定スル所初審法官ノ認
 定スル所ト反對スルモ敢テ不當不法ノ裁判ナリトシテ破毀ヲ求ム
 ルノ限リニテ如何トナシハ其心認一邊ノ如何ニ就テハ各
 人感發スル所ノ多少ニ因リ必ラスシモ異同ナキコトヲ保チ難キモノ
 ナレハナリ

判決

○九二 前條々ノ如クナルニ依リ東京上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナ
キモノナリ

第二百八十四號

○判文 明治十三年七月二十四日申渡

上告人 東京府日本橋區室町壹

下目十番地平民

關山源次郎

右代言人 同府神田區中猿樂町五

番地寄留滋賀縣士族

藤 信 吾

被上告人 同府日本橋區室町壹丁

平民

窪 八 田 惣 作

同府神田區美土代町壹丁

同府士族

藤 勝 復

近 藤 勝 復

板塀取拂一件上告人於テ東京上等裁判所ノ裁判ヲ不當ナリトシ上

告シテ破毀ヲ求ムル要領左ノ如シ

第一條

本訴原被告及大鐘善藏於テ各自所有スル日本橋區室町壹丁目九

番地 訴外大鐘同十番地 所有 上告人 同十一番地 被上告人 往昔舊幕人尼ケ

崎又右衛門ノ拜領地ナリシモ上告人ノ名義ヲ以テ府廳ヨリ拂下ケ

明治六年中之ヲ三分シテ其所有以境界ヲ定ムル際各自ニ属スル

所有地内ノ故障ヲ夫々、ル爲メ即該論所通行ノ事ヲ止ムル旨ノ
 談判亦遂因テ更ニ結約シ其所有ノ範圍内ニ適宜ニ處置シ且保護ス
 可キ責任アル旨ヲ其証書上告第二號証ニ境界相立分地沽券
 願立永久所持致候上貴殿御地所ニ聊不都合差障リ候義仕間敷候
 トアル是ナリ故ニ上告人カ自己ノ所有地内ニ板塀ヲ設ケ之カ取締
 事ヲ爲ス被上告人カ之ヲ故障スルハ是則該証ニ違背シ上告人ノ地
 所ニ對シ差障リ及所爲ニ非ズシテ何ゾ然レ其差障間敷トシ契
 約ナル該第二號証ハ本訴ニ付重大至要ノ關係ヲ有シ昔時ノ體質ハ
 一變シテ將來所有ノ權理ヲ保守スルニ盟約ナルニ原判文中「原告上
 人 第二號証ハ拂下ケ地ヲ境界相立原告ノ所有地ニ對シ差障間敷ト
 ノ契約ニシテ云々」トテ其單ニ文字ヲ讀過セラレタルニ止リ其明
 文ノ精神ト其効力如何ノ審理ニ及ハレザリハ頗不盡ノ裁判ト思

考スルトノコト

第二條

原裁判所ニ於テ被告即被上告人カ通行ノ權アルモノト裁定セラレ
 而シテ其通行權ヲ有スル理由ヲ明示セラレザリシナリ是レ恐クハ
 其通行權アルモノト認視セラレ、ノ原由ナカル可シ何トナレハ該
 地ヲ分有セシトキ及其以後各自ニ屬スル所有地内ト雖モ尙且互ニ
 使用ス可キ等ノ規約ナク又被上告人カ通行スル爲メ毫厘ノ償タモ
 受授セシコナク又論所ノ通路ヲ經サレハ公道ニ達セサルト云フニ
 モ非ス是以テ上告人ノ所有地ハ被上告人ノ爲メ將來自由チ欠ク可
 キ義務ノ生スル原由ナケレハナリ想フニ昔時一地面ニテ其所有權
 ノ一名ニアリシトヨリ通行セシ上ハ今尙通行權アルモノトセラレ
 ルノ旨意ニ外ナラサル可シ果シテ然ラハ該地面ノ所有上ニ一大變

動スリテ點ニ對シ審理セラレサルノミナラズ大單ニ其通行權ヲ有シタルモノトノ判決ニ止リ其通行權アル理由ヲ附セラレサリシハ審理不盡ノ裁判ト思考スルトノコト

第三條

原判文中「假令其通路ハ原告ノ所有地ト相成タルモ該通路ヲ止メサレハ相成ラサル程ノ妨害アルヲ証明無之特リ所有地ノ權ヲ以テ取締リテ名トシ云々」トス以下モ竊盜潛脫博徒集會ノ害アルヲ以テ之ヲ取締リテ爲セシモノニテ被上告人ト雖モ上告人カ此取締ヲ爲スハ他ニ惡意ノアルアツテ然ルモノトスルニモ非サルノミナラズ其取締ヲ爲サ、ルモ更ニ妨害ナシトノ申立ナケレハ現ニ妨害アルコトハ原被兩造ノ許認スル所ナルニ偏ニ被上告人カ之ヲ取拂ハシムルノ權アルモノト誤認セラレ原告申分不條理ニ付難及採用ト判決アリ

リシハ審理不盡ノ裁判ト思考スルトノコトニ對シテハ、
第四條

原判文中「原告第一號証實地ノ繪圖面ニ因テ之レヲ視ルニ被告ノ居住ヨリ被告所有ノ土藏ニ至ルニ論所ノ通路ヲ以テスレハ往還ニ出テスレテ且近ク之レヲ東北ノ通路ニ因レハ往還ニ出テ、且遠シ」トス以下モ抑本案ノ爭點タル被上告者ニ於テ西南ニ當レル路次ハ舊來通行ノ便ヲ得タリシモ上告者カ設置セシ板塀ノ爲メ其便利上妨害アリト主唱シ且ツ其繪圖面ヲ提供シ該圖面中甲乙丙丁戊ヲ記號ヲ掲ケタリ然リ而シテ其西南ノ路次及ヒ東北ノ路次トモ上告者乙第一號繪圖面ノ如ク必ス往還ニ出スレハ土藏ニ達スルヲ得ス然則其往還ニ出テサル路次ハ繪圖面中青着色〔下水〕ヲ用ヒタル被上告者カ勝手口ヨリ土藏ニ至ル迄ノ内路次ナルニ之レヲ論所ト看認メラ

レシハ是則争點ノ範圍外ニ出テタル不法ノ裁判ト思考スルトノコ
被上告人答辨ノ要領左ノ如シ

第一條

上告代言人ハ上告狀第一條ニ於テ明治六年中室町一丁目九番十番
十一番地三分ノ際上告者ト被上告者ノ際ニ於テ被上告者ハ爾後論
所道路ヲ通行セサル旨確ト締約ノ上互ニ交換セシ契約書ナレハ上
告第二號証中其意味自カラ包含シアルニ原裁判所カ〔原告〕〔上告〕第
二號証ハ拂下ケ地ノ境界ヲ相立原告〔上告〕ノ所有地ニ對シ差障間敷
トノ契約ニシテ云々ト裁判セラレシハ不當ナル趣キ上告セシモ抑
モ上告第二號証ハ當時上告者ト被上告者カ新ニ該地ヲ分有セシ上
ハ向來各自分有ノ地境ヲ正シ其境界ヲ侵シ互ニ他地ニ妨害ヲ加ヘ
サル様契約ノ未交換シタル証書ニシテ新ニ該地ヲ分有セシ上ハ自

他分有地内ナル通路等ニ關スル舊慣舊約ヲ總テ相廢スルノ旨趣ヲ
以テ交換シタル契約証ニ非ス而シテ之ヲ該証明文ニ質スニ互ニ他
地ヲ侵掠スル等ノ妨害ヲ加ヘサル外道路通行ノ舊慣ヲモ總テ相廢
スヘキノ意ヲ包含シタルモノナリト見認メ難キカ故ニ該証ハ拂下
ケ地ニ境界相立原告〔上告〕カ所有地ニ對シ差障間敷トノ契約ニシテ
ト單簡ニ之レカ解釋ヲナシ到底上告者云フカ如ク論所道路通行ノ
舊慣ヲモ相廢スヘキノ契約ニハ非ルノ意ヲ以裁斷セラレシ者ナレ
ハ原裁判ハ決シテ不法ノ裁判ニハ非スト思量スルトノコ
第二條
上告代言人ハ上告第二條ニ於テ明治六年中地所三分ノ際上告第二
號証ノ如ク論所道路通行ノ舊慣ヲ廢シテ以來上告者ハ曾テ被上告
者ニ該路通行ノ權ヲ與ヘシト無之ニ原裁判所カ〔論所ノ通路ハ被告

〔被告上〕カ其通行ノ權ヲ有シタル者ナレハ云々ト裁判セラレシハ不當ナリト上告ス上雖モ上告第二號証ハ前條答辨ノ如ク該路通行ノ舊慣ヲモ相廢スヘキノ契約ニ非ス而シテ論所通路ハ控訴原告〔上告〕代理人カ原裁判所ニ於テ自カラ明言シタル如ク被上告者カ數十年間絶ヘテ該路ヲ通行シ來リタルモノニシテ爾後該慣行ヲ廢棄スルノ契約アルニ非レハ則チ被上告者ニ該路通行ノ權ヲ有スル論ヲ待マサズカ故ニ斯ク裁定セラレシモノナレハ原裁判ハ聊カ不法ノ裁判ニ非ストテ立上告ス

第三條 竊盜潛伏博徒蝟集ノ憂アルカ故ニ板塀ヲ建木戸締ヲ設ケテ之レヲ取締キ爲シタル者ニシテ其憂之レヲ答辨ナキヲ見レハ被上告者モ亦竊盜潛伏博徒蝟集ノ憂ヘ

テリト思惟セシ勿論ナルニ獨リ原裁判所カ〔該通路ヲ止メサレハ相成ラサル程ノ妨害アルノ証明無之〕云々ト裁判セラレシハ不當ナリト上告ス上雖モ第一條答辨ノ如ク上告第二號証ハ該路通行ノ權ヲ廢スヘキノ契約ニ非スシテ第二條答辨ノ如ク被上告者ハ正シク該路通行ノ權ヲ有セシモノナルニ付果シテ目下該路ヲ閉塞セサルハ大ニ自他ノ安寧ヲ妨害スヘキノ確タル事跡アルニ非レハ漫リニ該路ヲ閉塞シテ被上告者通行ノ權ヲ妨害スヘカラサル論ヲ待タサズ被上告者ニ於テ上告者云カ如ク實地自他ノ安寧ニ害アリト陳述セサルノミナラス上告者ニ於テモ確ト其事跡ヲ舉ル能ハス到底上告者カ該取締キ名トシテ被上告者カ有セシ通行權ヲ妨害セントスルノ所爲ニ外ナラサルカ故ニ斯ク斷定セラレシモノナレハ原裁判ハ聊カ不法ノ裁判ニハ非ラストノコト

第四條

上告代言人ハ上告狀第四條ニ於テ原裁判所カ其通路タルヤ原告第壹號証實地ノ繪圖面ニ因テ之ヲ視ルニ被告ノ居住ヨリ被告所有ノ土藏ニ至ルニ論所ノ通路ヲ以テスレハ往還ニ出スシテ且近ク之ヲ東北ノ通路ニ因レハ往還ニ出テ且遠シ云々ト裁判セラレシハ原被兩造ノ爭論外ニ出タル不當ノ裁判ナリト上告スレト此ニ依レハ近ク彼レニ依レハ遠キハ固ヨリ實地ニ適セサルニ非ス獨リ被上告者カ其遠近ニ論ナク舊來得タル通行權ヲ妨害セラレ、道理ナシトシテ起訴セシ理由ニ適セサルノミ然レモ判文中其通路タルヤノ下モ被告カ其通行ノ權ヲ有シタルノ上ハ中間百十九字ノ如キハ之ヲ存スルモ爲メニ該詞訟ノ主點ニ光輝ヲ増益スルニ非ス之ヲ削ルモ其主點ニ効力ヲ減殺スルニ非レハ其レ上告代言人陳述ノ如ク全ク

不當ノ裁判トスル爲メニ原裁判ヲ破毀セラレヘキノ道理ナシト思料ス況シヤ其判文中通路ノ遠近全ク實地ニ當ラサルニ非ルオヤ

第一 辨明 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

本案ハ左列三項ヲ推究スルヲ緊要ナリトス

第一 上告第三號証契約書ハ上告者〔**控訴**〕ノ所有地内ヲ被上告者〔**被告**〕ノ通行ヲ妨事ヲモ止メタルノ効力アルモノナルヤ否ヤ

第二 第三號原裁判所ノ判文中ニ被上告者カ從前通行仕來リタルト指

第三 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第四 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第五 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第六 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第七 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第八 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第九 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第十 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第十一 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第十二 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第十三 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第十四 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第十五 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第十六 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第十七 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第十八 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第十九 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第二十 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第二十一 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第二十二 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第二十三 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第二十四 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第二十五 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第二十六 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第二十七 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第二十八 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第二十九 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第三十 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第三十一 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第三十二 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第三十三 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第三十四 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第三十五 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第三十六 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第三十七 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第三十八 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第三十九 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第四十 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第四十一 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第四十二 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第四十三 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第四十四 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第四十五 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第四十六 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第四十七 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第四十八 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第四十九 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第五十 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第五十一 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第五十二 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第五十三 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第五十四 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第五十五 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第五十六 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第五十七 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第五十八 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第五十九 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第六十 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第六十一 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第六十二 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第六十三 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第六十四 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第六十五 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第六十六 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第六十七 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第六十八 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第六十九 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第七十 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第七十一 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第七十二 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第七十三 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第七十四 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第七十五 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第七十六 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第七十七 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第七十八 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第七十九 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第八十 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第八十一 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第八十二 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第八十三 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第八十四 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第八十五 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第八十六 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第八十七 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第八十八 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第八十九 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第九十 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第九十一 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第九十二 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第九十三 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第九十四 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第九十五 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第九十六 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第九十七 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第九十八 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第九十九 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第一百 被告ノ主張ニ依リテ被告ノ主張ニ當ラサルニ非ルオヤ

第二條

上告〔控訴〕第二號証ヲ閱スルニ其文言ニ〔略圖未引之通境界相立分
 地沽券願立永久所持致候上ハ貴殿御地所へ聊不都合差障候義仕間
 敷候〕ホアリテ該証書ニルヤ舊シ尼々崎又右衛門カ壹人ノ受領地ナ
 リシ之更京上侍者被止告者及ヒ訴外人犬鐘善藏ノ三人ヒテ分有テ
 定ムル時ニ際シ結約シタルモノニテ此証書文言中ニ被上告者〔控訴〕
 カ右フ尼々崎又右衛門壹人ノ受領地ナル頃ヨリ仕來リタル通行ヲ
 止スルトノ特ニ明文ハアラサルニ從來〔壹人〕ノ受領地ナリシヲ更ニ
 三人ニ分割シテ所有シ區畫ヲ確定スルハ該地所有ノ一變轉ナルニ
 會テ一人ノ受領地ナリシ時ニ受領主カ借地人ニ通行セシメタル線
 路ヲ受領地主カ上地ノ後更ニ該地ヲ分割シ所有ヲ確定スルノ後上
 告者カ所有トシタル地内ニ在テ猶其通行ヲ繼續セシムルトノ明
 約モ亦アリコトナシ然而シテ假ニ上告第二號証ノ契約ナキ時ニ在テ

論スレハ單ニ被上告者ハ其通行ヲ繼續シタルモノトス可キ理アル
 然如キモ既ニ該証ニ〔貴殿御地所へ聊不都合差障候義仕間敷候〕ト契
 約シタルハ則本訴ニ争フ通行ノ如キハ上告者ノ所有地ニ取リテ不
 都合ナルハ言テ俟ス差障トナルモノナルカ故ニ其通行ノ事モ第二
 號証契約者双方ノ思慮シテ該証ニ包含シタルモノト解釋セサルナ
 得ス且ツ双方ヨリ呈出シタル圖面ヲ見ルニ本訴争フ所ノ通行ヲ止
 スル被止告者ノ土藏ハ他ニ通行スル所ナキ地況ニアラス傍以上
 告第二號証契約ハ其効用ノ目的如何ヲ勘査シ該地ノ實況ヲモ參照
 シ其契約者ノ意思ヲ推考シテ以テ解釋ヲ下タサ、ル可カラズ然ル
 者原裁判所ハ單ニ〔原告第二號証ハ拂下地ノ境界ヲ相立原告ノ所有
 地へ對シ差障間敷トノ契約ニシテ〕云々ト判示シ本訴ニ争フ所ノ通
 行ヲ止トメタルノ証トセサリシハ未タ其理ヲ盡サ、ル不相當ノ裁

判テ其トス
 第三條
 原裁判所ハ其判文中論所ノ通路ハ往古ヨリ西南東北ノ兩路通行相
 成來ニ因テ原告モ明言シ其通路ヲ城ヤ原告第壹號証實地ノ繪圖
 面ニ因テ之ヲ視ルニ被告ノ居住ヨリ被告所有ノ土藏ニ至ルニ論所
 ノ通路ヲ以テ之シテ往還出テスシテ且近ク之レチ東北ノ通路ニ
 因シテ往還出テ且遠シ是レ被告カ舊來ノ通路ヲ妨ケラレタル
 故障故障所以ナリトテ其往還ニ出テサル線路ヲ指シテ以テ
 被告上告者〔控訴〕カ本訴故障ノ起因トシタル之ヲ原裁判所ノ書類
 ニ徴スルニ被告上告者カ其所有ノ土藏ニ至ルニ往還ニ出テスシテ自
 宅裏口ヨリ通行仕來ルニ申立タルヲ見テ却テ被告上告
 者カ原裁判所ニ呈出シタル圖面ヲ見ルニ其西南ノ路ト云フハ室町

壹丁目ノ里俗釘店ト稱フル往還ヨリ被告上告者ノ所有地内ナル窪田
 彌兵衛ノ建物ト關山源三郎ノ建物トノ間ニ在ル小路ヲ經ルヲ以
 テ通路トシタルトシテ陳述ナリシコトハ該圖面上右ノ西南ノ小路及ヒ
 其線路ノ末ニ經路ト記シ且ツ往還ノ入口ヨリ本訴爭論ニ係ル板塀
 ノ場所マテ朱線ヲ引キ其朱線ニ順次甲乙丙ノ印ヲ記シタルニ據テ
 一目瞭然タリ然レハ此西南ノ線路ヲ以テシテ被告上告者ノ住宅ヨリ
 論所ヲ經テ土藏ニ到ルニハ室町壹丁目里俗釘店ト稱フル往還ニ出
 ツルモノナルニ原裁判所ハ前文ノ如ク西南ノ一路ハ往還ニ出テサ
 ルモノトシテ其通行線路ハ被告上告者住宅ノ裏口ヨリ直ニ論所ニ到
 ルモノトシテ申立タル線路ヲ指示シテ説明シタルハ誤謬ヲ免カレ
 判決

六〇三

前條々辨明ノ理由ナルヲ以テ東京上等裁判所ノ裁判ヲ破毀シ更ニ本院ニ於テ裁判スル左ノ如シ

本訴上告者〔控訴原告〕第一號証契約書ハ前第二條辨明ノ如クニテ該地ノ所有分畫確定ノ時從前被上告者〔控訴被告〕カ尼ヶ崎又右衛門ノ地借中ヨリ仕來リタル處ノ現今上告者ノ所有トナリタル地内ニ係ル場所ノ通行ヲモ止メタルコトヲ包含シタルモノト解釋セサルヲ得ス而シテ被上告者〔控訴被告〕ハ別ニ上告者〔控訴原告〕ノ所有地内ヲ通行スルノ權利ヲ得タル証據ナケレハ上告者〔控訴原告〕カ自己ノ所有地取締ノ爲メニ板塀ヲ取建ルモ被上告者〔控訴被告〕ニ於テ之ヲ取拂ハシメシトスル要求ハ相立サルモノ也
但訴訟入費ハ規則ノ通被上告者ヨリ償却ス可シ

明治十四年二月十八日出板

印 行
發 免 所

報 告 社

東京京橋區
瀧山町四番地

(定價十五錢五厘)

（次略）

東山書局

（次略）

（次略）

（次略）



